

現代紀行文

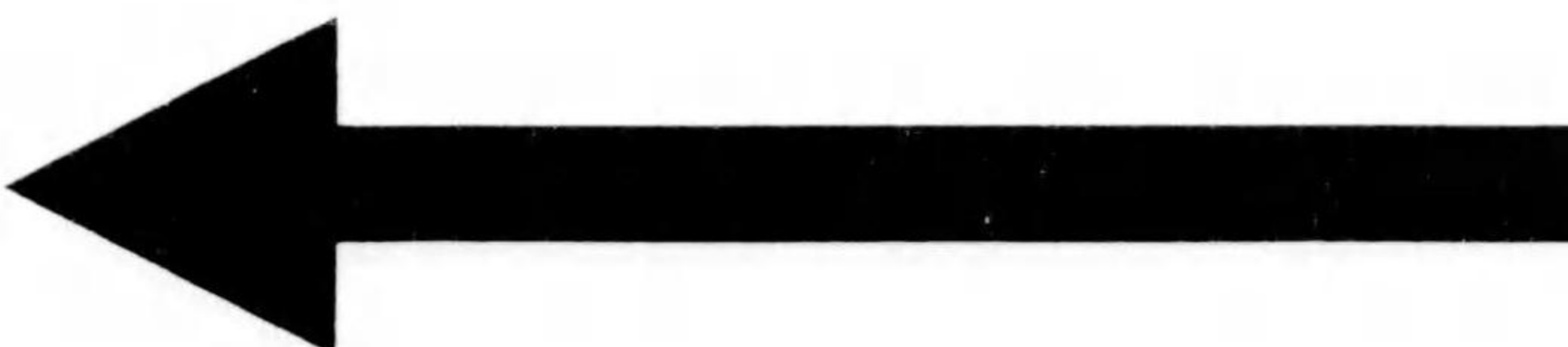
小林鴎里先生著

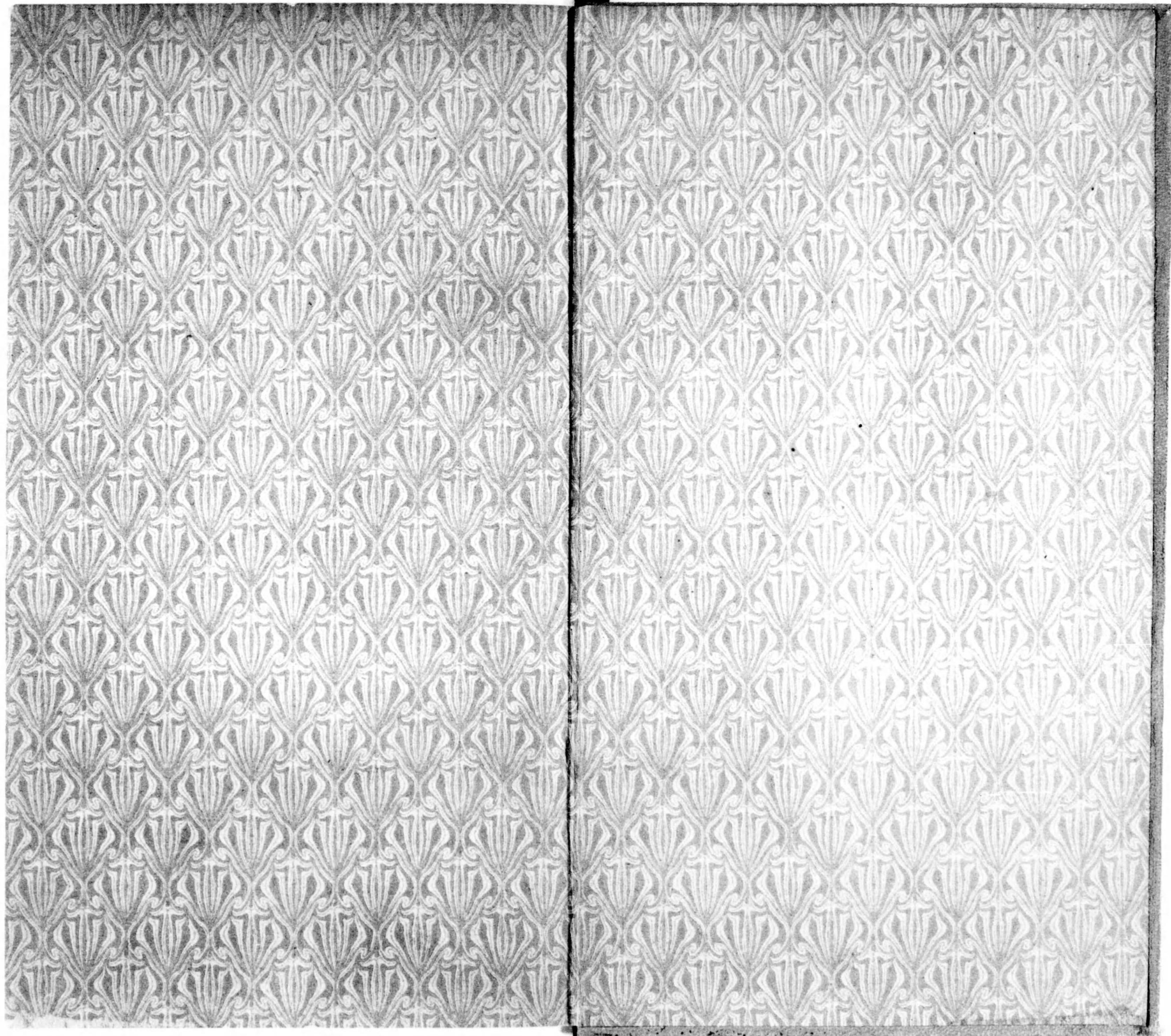


東京  
尚榮堂發行



始





特100

17.



はしがき

題して紀行文と云ふも、名勝舊蹟を紹介するもの多  
く、紀行文として山紫水明を味はで、單に案内記として  
見るべく由來著者は東京に生れ、現に東京に生活し居る  
ものなれば、従つて山水の自然美に接觸したる度数の極  
めて僅少なるは茲に露骨に告白するところなり。此の所  
謂懐る育ちにして、殊更に此の書を編むの理由は、もと  
著者は山水を愛す、何やらは居ながらにして名勝を知る

現代紀行文

目次	○ 熱海	○ 箱根	○ 小田原	○ 大磯	○ 江の島	○ 鎌倉	○ 横濱
	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
	七	六	五	四	三	二	一

一 東海道地方

	○ 富士山	○ 田子の浦	○ 久能山	○ 静岡	○ 大井川	○ 井伊谷宮	○ 辨天島	○ 御嶽の奇勝	○ 岩内瑞巖寺
	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七

目次

とか、著者は其の何やらの資格を有するものにあらざるも、百聞は一見に如かずの哲言を無視したるは、畢竟書肆尙榮堂主人が再三の囑望に因るものなり。本書に掲ぐるところ、内地の勝地は其の大體に於て輯めたるも、如何せん小冊子、或は蛇を捕へ龍を逸したるものなさにあらず。若夫れ、事實の錯誤などあるあれば、乞ふ机上の調査たることを諒せられんことを。

大正二年秋十月

鶯里山人しるす

文行紀代現

目次

○齋宮舊蹟……………一六

○伊勢大廟……………一九

○二見が浦……………二二

○伊勢音頭……………二三

○日和山……………二四

二 東京附近(東海道外)

○氷川公園……………二五

○小金井の櫻……………二六

○多摩川の舟遊……………二七

○高雄山……………二八

文行紀代現

目次

○眞間の浦……………三〇

○稻毛の海水浴……………三〇

○成田……………三一

○宗吾靈堂……………三二

○香取神宮……………三三

○鹿島神宮……………三四

○息栖神社……………三五

○鹿野山……………三六

○誕生寺……………三六

○清澄寺……………三七

○鋸山日本寺……………三七

三 近畿地方

○船形觀音……………三六

○那古觀音……………三九

○箱山と北條……………四〇

○銚子……………四一

○偕樂園……………四二

○大洗……………四三

○琵琶湖……………四四

○石山寺……………四五

○唐崎の松……………四六

目次

○堅田の浮御堂……………四七

○三井寺……………四八

○日吉神社……………五〇

○竹生島……………五一

○義仲寺……………五二

○圓山公園……………五二

○伏見の稻荷……………五三

○清水寺……………五五

○通天橋……………五六

○金閣寺……………五七

○嵐山……………五八

現代紀行文

目次

- 宇治……………六〇
- 洛北の三尾……………六三
- 東山……………六五
- 比叡山……………六六
- 八瀬の里……………六七
- 愛宕山……………六八
- 保津川……………六九
- 春日神社……………七〇
- 春日山と三笠山……………七二
- 嫩草山……………七四
- 猿澤の池……………七五

- 奈良の大佛……………七六
- 長谷寺……………七八
- 吉野……………七九
- 月が瀬……………八四
- 笠置山……………八六
- 大和三山……………八七
- 法隆寺……………八八
- 高野山……………八九
- 和歌の浦と紀三井寺……………九三
- 濱寺公園……………九五
- 妙國寺の蘇鐵……………九七

現代紀行文

目次

- 住吉……………九六
- 道明寺天紳……………九九
- 信貴山……………一〇〇
- 男神神社……………一〇一
- 四條堰神社……………一〇二
- 繪島……………一〇三
- 寶塚鑛泉……………一〇四
- 箕面山……………一〇四
- 有馬温泉……………一〇六
- 摩耶山……………一〇七
- 布引瀧……………一〇八

四 中國地方

- 須磨……………一〇九
- 須磨寺……………一一〇
- 舞子……………一一一
- 明石浦……………一一二
- 天郷の梅林……………一一三
- 手枕の松……………一一四
- 尾上の松……………一一七
- 高砂の松……………一二九
- 石の寶殿……………一二九

現 代 紀 行 文

目次

○曾根の松 ..... 一〇〇

○書寫山 ..... 一〇二

○廣峰神社 ..... 一〇三

○龍神社 ..... 一〇四

○舟坂山 ..... 一〇五

○芳嵐園 ..... 一〇六

○西大寺 ..... 一〇七

○後樂園 ..... 一〇九

○借樂園 ..... 一一三

○吉備津神社 ..... 一一三

○吉備の中山 ..... 一一三

○有木山 ..... 一三四

○備中高松 ..... 一三六

○藤戸の舊跡 ..... 一三七

○沙美海水浴場 ..... 一三九

○圓通寺 ..... 一四〇

○金神 ..... 一四一

○高島行宮の舊蹟 ..... 一四二

○福禪寺 ..... 一四三

○阿伏兔觀音 ..... 一四四

○千光寺 ..... 一四四

○佛通寺 ..... 一四六

現 代 紀 行 文

○縮景園 ..... 一四六

○宇品港 ..... 一四六

○嚴島 ..... 一四六

○千疊閣 ..... 一四六

○彌山 ..... 一四六

○紅葉谷公園 ..... 一四六

○長濱公園 ..... 一四六

○大元公園 ..... 一四六

○蓬萊巖 ..... 一四六

○桂濱の松林 ..... 一四六

○錦帯橋 ..... 一四六

五 山陰地方

○壇の浦 ..... 一五八

○天の橋立 ..... 一六〇

○成相山 ..... 一六二

○智恩寺 ..... 一六三

○玄武洞 ..... 一六四

○城崎温泉 ..... 一六六

○出雲大社 ..... 一六七

○大山 ..... 一六八

○尖道湖 ..... 一六九



六 四國地方

栗林公園 一七〇

屋島 一七二

寒霞溪 一七三

白峰神社 一七四

海岸寺 一七五

彌谷寺 一七五

善通寺 一七六

金刀毘羅神社 一七七

琴彈の濱 一八二

七 九州地方

小松島 一八一

鳴戸 一八二

大龍山 一八七

日の峰 一八七

星が岡 一八八

道後 一八九

伊佐爾波神社 一九〇

十六日櫻 一九一

門司 一九二

現代紀行文

清瀧公園 一九三

速戸神社 一九四

耶馬溪 一九五

宇佐八幡宮 一九七

香椎宮 一九八

箕崎宮 二〇〇

博多東公園 二〇一

福岡西公園 二〇三

太宰府神社 二〇四

寶満山 二〇五

天拜山 二〇五

都府樓の舊址 二〇六

武藏温泉 二〇七

久留米水天宮 二〇八

高山彦九郎の墓 二〇九

將軍梅 二〇九

高良山 二〇九

神野茶屋 二一一

松原神社 二一二

田島神社 二一二

武雄温泉 二二四

名護屋城址 二二四

文行紀代現

目次

- 唐津松浦橋……………二二六
- 舞鶴公園……………二二六
- 七 竈……………二二七
- 熊本城……………二二八
- 本妙寺……………二二九
- 成趣園……………二三〇
- 阿蘇山……………二三一
- 菊池神社……………二三三
- 山鹿温泉……………二三三
- 林温泉……………二三四
- 球摩川の急流……………二三五

文行紀代現

- 鄭成功の碑……………二三五
- 海神社……………二三六
- 磯島津邸……………二三七
- 鶴丸城址……………二三八

八 東山道西部地方

- 長良川の鵜飼……………二三九
- 全華山……………二四〇
- 養老の瀧……………二四二
- 關が原古戰場……………二四三
- 南宮神社……………二四五

- 不破の關址……………二四五
- 霞間が谷……………二四六
- 虎溪山永保寺……………二四八
- 寢覺の床……………二四九
- 木曾の山道……………二五一
- 氷が瀨……………二五二
- 岡谷……………二五三
- 諏訪湖……………二五四
- 浅間温泉……………二五六
- 諏訪神社……………二五七
- 善光寺……………二五九

現 代 紀 行 文

目 次

- 城 山……………二六一
- 河中島古戰場……………二六二
- 姨捨山……………二六三
- 戸隠神社……………二六四
- 碓氷峠の紅葉……………二六五
- 軽井澤……………二六七
- 浅間山の噴煙……………二六八
- 別所温泉……………二七〇
- 陽田中と澁の温泉……………二七〇
- 芙蓉湖……………二七一
- 赤倉温泉……………二七二

九 東山道東部地方

- 妙義山……………二七三
- 霧積温泉……………二七六
- 赤城山……………二七七
- 榛名山……………二七八
- 伊香保……………二七九
- 澤渡温泉……………二八二
- 四萬温泉……………二八三
- 草津温泉……………二八三
- 多湖の碑……………二八四

現 代 紀 行 文

目 次

- 山上の碑……………二八五
- 今井澤の碑……………二八六
- 神無川……………二八七
- 佐野の渡……………二八七
- 高山神社……………二八八
- 大谷観音……………二八九
- 日光廟……………二八九
- 二荒山神社……………二九二
- 日光山の瀑布……………二九三
- 中禪寺湖……………二九六
- 日光湯湖……………二九七

- 男體山……………二九八
- 羽黒山……………二九九
- 鹽原温泉……………三〇〇
- 那須温泉……………三〇三
- 國造の碑……………三〇六
- 黒田原温泉……………三〇七
- 白河の關の蹟……………三〇七
- 南湖……………三〇九
- 轉寢の森……………三一
- 岩瀬の杜……………三二
- 匂來の關の跡……………三二

文行紀代現

目次

- 湯本温泉……………三六
- 赤井薬師……………三六
- 木奴實浦……………三七
- 松川浦……………三六
- 東山温泉……………三〇
- 安積沼……………三二
- 安積山……………三二
- 山の井……………三三
- 三雄山……………三四
- 安達が原の舊蹟……………三五
- 信夫公園……………三六

文行紀代現

目次

- 衣笠松……………三八
- 榴が岡……………三九
- 櫻が岡公園……………四〇
- 宮城野……………四一
- 多賀城址と壺の碑……………四二
- 末の松山……………四三
- 松島……………四四
- 中尊寺金色堂……………四六
- 高館……………五一
- 浅蟲温泉……………五二
- 十和田湖……………五三

- 椿館……………三七
- 文字摺石……………三八
- 高湯温泉……………三九

一〇 奥羽地方

- 千歳公園と千歳山公園……………三〇
- 飯阪温泉……………三一
- 靈山……………三三
- 有耶無耶の關……………三五
- 斗藏山……………三六
- 千貫松……………三七

二 北陸地方

- 雄鹿半島……………三五
- 米山……………三五
- 曾津油田……………三五
- 順徳天皇の御陵……………三六
- 彌彦神社……………三七
- 賤が嶽……………三八
- 氣比の松原……………三九
- 金が崎神社……………四〇
- 足羽山……………四一

目次

- 鹿島……………三六二
- 山代温泉……………三六三
- 山中温泉……………三六四
- 那谷寺……………三六五
- 片山津温泉……………三六六
- 金澤兼六公園……………三六六
- 猿丸神社……………三六九
- 和倉温泉……………三六九
- 高岡公園……………三七〇

—(終)—

# 現代紀行文

小林鶯里

## 一 東海道地方

### ○横濱

巨鯨白波を蹴つて、一直線に東せば、米國に航すべく、南せば南洋に直通すべく、船舶の往來出入、織るがごとく、市街は、殷賑を極めて居る、開港以來五十餘年を閱するのみなるに、斯くも隆昌を極むるに至つたのは、海外交通の要路に當れると、帝都の關門たるの關係から來たのである、附近形勝の地には、南方一里に本牧の岬

横濱

其の附近の屏風が浦、杉田の梅、なほ南せば、富田の海水浴場など何れも遊覽の價値は充分である。(新橋より一八哩)

鎌倉

鎌倉は、東海道線大船驛より分岐せる横須賀線に位し、新橋より僅に二時間にて達することを得べく、遊覽の客常に絶えず、三方は山に包まれて、南の一方のみが海に面して居る。所謂由井が濱とは是れである。鶴が岡八幡宮は、山腹に鎮座ましくして、昔ながらの社殿は、丹青の美、山の風光と相待つて、趣がある、建長、圓覺等の禪寺は、北條氏の信仰を遺し、鎌倉宮には、護良親王悲憤の跡を留めて、低回顧望去る能はざらしむる感なくんば非ずといひたい。

治承の年、源右府が、幕府を開き、北條氏、足利氏に至るまで、二百有餘年間、繁華を極めた地で、今は、古の面影だに残つて居ないが、古社寺は、僅に其の跡を留めて、松籟の磯打つ浪と相和して、遊覽地として存在して居る。(新橋より約三十哩)

江の島

鎌倉なる七切通しの一なる極樂寺の切通しから、七里が濱の磯づたひに西せば、江の島は、目睫に迫つて来る。今は、鎌倉驛から電車の便がある。片瀬から長橋を渡つて、島に入れば、兩側は、貝細工や、其の他種々の土産物を賣る店と、旅舎とが、軒を並べて居る。少女が『買つて入らつしやい、お土産お買ひなさい』と叫ぶ聲は、

耳も聳せんばかりで、俗臭鼻を衝くの思ひがある。此に祭れる神社は、邊津、中津、奥津の三社で、奥津の宮から西に下れば、其の南端に稚兒が淵がある。それから細徑を岩壁に沿ふて、棧橋の如くに造つて、龍窟に導くことゝなつて居る。洞口の濶さは、方一丈餘、奥行四十間。古の窟辨天とは、之れである。(鎌倉から電車)

○大磯

海水浴場の霸王を以て、目せらるゝところである。古の小湊の濱で、奇岩の其處此處に突起したる間を浴場に當てたもので、巽すがごとき波は見られないが、怒濤、岩に碎けて、雪を飛ばすがどとき壯觀は、珍らしくない。婦女子さへも、岩間にちやぶく波立たせて、游

ぐ状など快よい。此の地には、貴顯紳士の別荘は、數百もあつて、四時ともに賑ふて居る。

心なき身にも哀は知られけり、鳴立つ澤の秋の夕ぐれ。

とは、西行法師の詠まれたもので、其の邊跡は、町の西、西行堂、虎子堂等がある。(新橋より四十六哩餘)

○小田原

國府津から電車に賃して、西に馳せたが、一大長橋に迎へられた。是は、酒匂橋で、酒匂川に架してある。細い汚ない路をうねくして、電車は、絶えず鈴を鳴らしつゝ、徐行するので、極めて遅々たりである。兩側に人家櫛比して、時に突如として濫紙色したる漁夫

や、子供が横合から突然に飛び出して、轢かれることがあるからだとは、危険々々。三十分ばかりで、小田原の町に着いたので、降車して、其處等あたりを見たが、とり留めて、云ふほどの事は無い。唯、小峰の梅林が、山懐に位して、一月には、梅花が満開するとのことである。其の温暖なること推して知るべきである。(新橋より國府津まで四十九哩餘)

○箱根

箱根といへば、昔から七湯を以て、世に聞えて居るが、今は、十湯以上もある。最も勝地として富んで居るのは、宮の下で、湯本の電車終點から早川の高崖に沿ひて、一里三十町の爪先上りである。其

の奈良屋の階上から望めば、相模の海の白帆が、白鷗の飛ぶが如く、雲煙糝糊の中に快哉を叫ばしむる趣がある。宮の下の崖下五町に堂が島、又其の隣に底倉、それから木賀、強羅、小湧谷、蘆の湯、仙石湯などの温泉がある、殊に湖尻より小舟を備ふて、蘆の湖を横ぎるときは、身は、塵外にありて、登仙したるの感が起る。

箱根湯元

末 廣 鐵 腸

浴樓連日雨如麻。料識京城寒漸加。硫氣蒸空滿山暖。江楓林外有梅花。

○熱海

小田原より輕便鐵道の便を借るときは、二時間餘で達せられる。此



の地は、東南海に臨み、西北山を負ふて、冬は、極めて温かく、浴後南面せる椽側に出づれば、袷着で居るも、寒中尙ほ寒さを感じぬ。故に避寒地として、浴客の多く集るところ、梅園の晩鐘、温泉寺の古松、横磯の晩涼、來宮の杜鵑、魚見崎の歸帆、初島の漁火、和田山の暮雪は、此の地の八景である。此に特有なるは大湯で、一晝夜二回、時を期して、大噴出すること、其の最も盛なるときは、數臺の蒸氣唧筒を以て、水を噴出せしむるが如く、熱泉の迸り出で、蒸氣は、四方に散亂し、往々廣き區域に亘りて、温かき雨を降らすことがある。其の音響の物凄きこと、十數門の砲聲を一時に聞く様である。

○富士山

雪の冠して、雲の帯したる山、白扇倒まに懸る東海の天などとは、富士の形容である。如何にも崇高なる山岳は、蓋し世界無比であらう。夏季に至れば、登山を試むるもの多く、近年益々増加して四五萬人に達するは、珍らしくない。其の登山口は、種々なるが、最も多いのは、東京よりする東表口又は須走口、關西からする大宮口、甲斐からする吉田口である。毎年陰曆六月朔日に山開きをなし、八月二十六日に閉づるのが例となつて居る。山頂朝暎に對する感想や、果して如何。

天つ日の照らせる四方の國中にたぐひなしといふ山は富士の根。

富士の山同じ姿に見ゆるかなわなた面もこなた面も。

東京方面からせんには、御殿場驛（新橋から七十一哩餘）關西方面からは、鈴川（大阪より二百八十哩）又は富士驛（鈴川の西隣驛）よりし、甲斐からは大月（中央線）からするのである。

○田子の浦

富士うつす田子の浦わの夕なぎに舟漕ぎ寄する山の上まで。此の地の景を詠み得て、實に巧と云ふべきである。鈴川驛の背後の高埠を登れば、それで、老松林立、白砂數十町、向へば茫々たる蒼海、願れば富士を望むことが出来て、實に絶景である。（新橋より鈴川まで七十一哩）

○久能山

江尻から西南一里餘、駿河の國、安倍郡の海岸にあつて、突起せる高丘である。南は、渺茫たる駿河灣に面し、東北には、富士を望み、三保の松原、清見瀉、清水港は、其の脚下に眺められ、真帆片帆の點々たる、汽車の煤煙を吐いて走る状など、手に取る様である。山上には、家康を祀れる久能神社あつて、二三の茶亭が、登臨の客の便に供して居る。（新橋より江尻へ百十三哩）

靈峰斗出海中央。潮氣時々騷望長。米利堅洲知何處。雲東一碧大東洋。

○静岡岡

昔は、府中といつて、家康養老の地として、駿府ともいつた。當時は人口約五萬ある。市の北隅に賤機山といふがある。社殿は、三重閣で美麗を極め、木花咲耶姫命を祀つてある。其の境内は、静岡公園となつて、櫻樹數百株を栽ゑて、美觀を添へたので、春陽駘蕩の節、花下に戯れる群集は、貴賤の別はない。(新橋より百二十餘哩)

○大井川

箱根八里は、馬でも越すが、越すに越されぬ大井川、とは昔の事、今は、水が出やうが、風が吹かうが、一路平安、僅に二三分時で走

つて越すは、文明の賜ともいふべきであらう。右手に富士、左手に蒼波を眺めつゝ、金谷の驛を後にせば、忽ち暗黒界に入る。夜泣石とて古より名高き小夜の中山の隧道に入つたのである。西行法師が、年たけてまたこゆべしと思ひきや、命なりけり小夜の中山。と詠まれたのは此處。(新橋より金谷まで百四十哩)

○井伊谷の宮

濱松より西方四里、道途平坦、俾を通ずることが出来る。此に鎮座まします宮居は、後醍醐天皇の皇子宗良親王を奉祀せるもので、其の陵墓は、社の背後にある。親王は、天臺座主となり、尊證法親王と稱へられたが、後還俗して、征夷討將軍となり、足利氏のために、

屢苦戦し、終に此の地に薨せられた、別格官幣社として祀られてある。境内は、濱名湖に臨んで、風光明媚、英靈は、永へに此の地を守るであらう。

○辨天島

濱松の西、舞坂の鐵橋を過ぐれば、左は、渺茫として際涯なき太平洋で、右は、濱名湖に臨んで、湖の海と通ずる所に數多の小嶼が、翠松を戴いて、漣に漂ふて居るがごとく見ゆるは、即ち辨天島の海水浴場である。此の湖は、淡水湖であつたが、明應年間の地震にて、地の陥落して、海と通ずるに至つたといふことである。浴岩の風光明媚なるは、行く所として可ならざるは無く、見るものとして、快

感を與へないものはない。古の所謂遠つ淡海で、

夏をとへば引佐細江や秋の聲

とは、紹巴の口吟である。沿岸支灣に富みて、勝地は、擧げて數へられぬ。南岸なる館山寺は、湖畔中、最も風光の美を以て、稱せらるゝ所で、夏時浴客の賽して、其の景に見とれる所は、此處。(新橋より辨天島まで百七十三哩)

○御嶽の奇勝

甲斐西山梨郡にある。金峰山中、荒川の沿岸、一里半ばかりの間を昇仙峽と稱へて、白雲と碎け、碧潭となり、溪流の渦き起るところ、兩岸漸く迫りて、水石相搏ち、急湍奔騰、かゝりて幾多の瀑布と

なり。其の奇岩の到抵名状すべからざるものなど、數ふるに違はな  
い。巨岩ありて、水を抜くこと數百尺、羅漢山と、もに前面に峙立  
せるものは、覺圓峰である。大小の斧越、これに加はりたるもの、  
ごとく、或ひは斜に、或ひは直に龜裂せる有様は、喩ふるに物はな  
い。其の面には、青楓奇松の僅に根を托して、將に崩れかゝつてあ  
るが如き一點に茂生するものがある。實に造化の妙を極めたものと  
云はねばならぬ。蓋し御嶽の新道中にありて、絶勝の地であらう。  
更に峭立したる奇岩の下、磊々たる石道を上れば、右方の巨岩の倒  
にかゝるところ、河中の一の尖岩の相抱擁して、危く支ふるがごと  
く、崩れ來たりて、行人を壓せんとするの趣あるなど、唯奇絶、

○岩内瑞巖寺

快絶と云はうか。前面の溪間に水洙を跳らすところに一橋を架して  
ある。其の畔に一懸泉ありて、直下幾十丈、山谷ために震ふの感が  
ある。即ち仙昇橋と仙峩瀑とは、これである。かくて進んで猪狩の  
村落に入り、それより約半里の所に御嶽金櫻神社がある。神殿等は  
悉く五彩を施し、金銀を用ひ、結構壯麗を極めてある。日本武尊  
素盞鳴尊、少彦名命を合祀してある。(飯田町より甲府へ八十哩)

伊勢松坂停車場より一里二十五町、岩内山の麓にある。むかし空海、  
其の山頂に瑞雲の靉靄たるを見て、巨岩の面に觀音の像を彫刻し、  
其の側に一字の精舎を營む。即ちこれである。域内は、山を負ひ、

欠

る。今此の域内にありて名あるものを擧ぐれば、二の鳥居は、勅使参向のとき、此所にて清め穢ふなりと。其の鳥居を入れれば、神樂殿大麻授與所あり。勅使饗應の場所たる九條殿の前には、大庭あり。三つ石は、直径一尺ばかりの石を鼎足にならざるものにして、神嘗祭、御遷宮のとき、河原禊を行ふところなり。社殿外圍の垣に設けたる板垣御門といひ、其の内に玉垣御門がある。普通の人はこれから内に入ることを禁じられてある。瑞籬御門は、最も内部にある御門で此の奥は、御正殿である。御正殿は、茅葺にして堀立柱である。屋上には、千木、鯉木がある。千木は、其の末を切らずして用ひ、高欄には、五色の玉を飾つてある。

別宮としては、多賀の宮とて、御正殿の正面にあたる山上にある。北御門橋を渡れば、神苑に入る。内に花木を植ゑ、大いに風致に富んで居る。是は、外宮の神苑なるも、五十鈴川の畔、宇治橋の内に、内宮の神苑がある。風致極めて深濶。すべて内外兩宮の構造殆んど同一である。(名古屋より宇治山田驛まで七十三哩)

○二見が浦

宇治山田驛より東の方二里の所にありて、電車の便がある。度會郡立石江村の海濱の名である。海岸より數十間を隔て、二個の大岩の相並んで、相距ること三間餘、大なるものは、高さ二十九尺、周圍百三十餘尺、小なるものは、高さ十二尺、周圍三十餘尺。いづれも

欠



東海道地方

二四

振り、脚を上下しつゝ出で來たり、同じ手振足つきにて、其の舞臺を互に行き過ぎ、雙方に入つてしまふ。其の間は、斷へず鳴物を、鳴らし居る。全く龜の子踊りで、唯、足と手とを振り動かすのみである。其の囃し方と舞妓は、いづれも娼妓で、観客は、其の踊りつゝある間に彼等の美醜を心に畫いて、其夜の酒席にはべらすとの事である。

○日和山

志摩の北部に屹立する小峰で、山麓より頂上までは、僅に三町に過ぎないが、頂上には、老松がありて、海越の松又は天神松ともいふのである。

日和山しぐれしあとにはほのみえて、

白雲かゝる海越のまつ。

との古歌がある。山上の眺望は、鳥羽港を擁する無数の群島、碁布羅列して、東は、伊勢灣を隔て、尾張知多半島、三河の伊良胡崎と相對し、風光の絶佳なることは、奥の松島に次いでのところである。

二 東京附近(東海道外)

○氷川公園

大宮公園とも云ふ。大宮驛から東方十餘町、武藏一の宮たる氷川神社の後方にして、約二萬坪の構内を有し、松杉蒨鬱として、櫻樹其

日和山 氷川公園

二五

欠

て、東京灣に注ぐので、其の流域は、四十餘里、河幅の最も廣きところは、七八町にも達する。鮎は、此の川の名産にして、夏季舟を浮べて、之れを獵するものが多い。立川驛にて下車し、十二三町にして達す。船は、大小種々あるも、最大なるは、十人乗にして、船中に於いて、潑刺たる鮎を味ふの興味は、得も言はれないのである。其の漁法は、鵜飼、待網、筥、投網、友釣などあるが、最も興味のあつるものは、羽網にして、其の多きは一回六七十尾を漁獲することがある。(飯田町より二十哩)

○高尾山

中央線淺川驛にて下車すれば、これから山路を上ること三十餘町に

して達することが出来る。一町ごとに標石ありて、上より何町目と記してあるから、道に迷ふの恐はない。頂上に薬王院と云ふのがあつる。聖武天皇の天平十六年に草創したるもので、僧行基が、其開基である。境内は、老松亭々として相連り、遠望は缺くるところあるも三伏の暑熱を知らぬから、こゝに避暑するものが多い。されど、もとより旅舎としてはないから、薬王院に請ふて、宿泊するのである。晩秋の頃に至ると、満山の紅葉は、恰も燃ゆるがごとく、賞遊すべきの價がある。琵琶の瀧、鼓の瀧などの瀑布がある。(飯田町より淺川へ約三十哩)

欠

本尊は、不動明主にして、天竺の毘首羯摩の作であるといひ傳へて居る。(本所より三十哩餘)

○宗吾靈堂

成田より一里餘、電車の便がある。本堂の背後に奥の院がある。此に宗吾の靈碑を安置し、毎年八月三日、大供養を執行せらる。これより酒々井驛に出づれば、東京への順路である。宗吾の事跡は、普く衆人の知るところで、今更贅々しく云ふまでもない。(本所より三十九哩、上野より四十一哩)

○香取神宮

佐原驛の東方三十町の所にある。香取町の町盡處から賽路に登石

道路をつくりて、導いてある。行くこと數百歩にして大鳥居の前に出る。これを入りて、石階を上るときは、境内に、老樹蒼鬱として繁茂し、就中木母杉といふは、二抱にも餘りて、神木と稱へられて居る。此の樹に椎の木きの寄生したるなど、頗る奇觀である。本社は、神武天皇の御宇、十八年の創建にして、經津主命を祭る。古來軍神として、皇室の御尊崇は、淺からぬことである。毎年四月十四日の軍神祭、十月三十日の大饗祭のごときは、雜踏噺へんに物がない。地は、一帶の芝生にして、翠松多く、其の間に數百株の櫻がある。眺望の勝は、香取が浦、十六島の絶景、一眸に集り、到底筆舌の及ぶところでない。

香取神宮より十八町なる利根川の南岸に津の宮河岸といへるところがある。神宮に参拜するもの、麓口で、其の河中に鳥居を建て、ある。故にこれを一の鳥居河岸とも稱へる。(兩國より四十九哩)

○鹿島神宮

津の宮河岸より船を備ひ、利根川に漕ぎ出で香取浦、十六島の外を環りて、加藤洲十一橋の下を潜り抜け、潮來に至りて、逆浪の海に出で、水路約五里ばかりにして、大船津の水際に達する。こゝより上陸して十八町を行くときは、鹿島神宮に至るのである。神宮は、常陸鹿島郡鹿島町の中央に位せる三笠山に鎮座まします官幣大社である。神武天皇の元年に創建したるもので、其の祭神は、武甕槌命

を主とし、經津主命、天兒屋根命を配祀してある。社殿の構造は、森嚴にして自から神威の崇高なるを感得せしめ、敬虔の念、自から額くに至る。

○息栖神社

前記の大船津より二里の水路を経て、霞が浦に隣れる北浦を南すれば、一基の鳥居が、水中に立つてある。其の兩側に男瓶、女瓶といへる奇石の水底に潜めるありて、天氣清朗、風、波を起さざるときは、熟視することが出来る。鹿島神宮の攝社にして、参拜者は常に絶ゆることはなす。

○鹿野山

東京灣汽船に乗れば、三時間半ばかりして、木更津に着し、それより五里にして山頂に達することが出来る。山中なる神野寺は、承和二年の創建にして、僧源瑜の中興したるものである。山の閑雅、幽邃なるは、言はずもがな、東京灣を隔て、横須賀、金澤と相對し、眺望絶勝の地である。盛夏此の地に避暑するものが多い。

○誕生寺

安房の國、湊村字小湊にありて、小湊山の山麓に位し、蒼海に面し、境内瀟洒にして、磬石の上に誕生堂といふがある。日蓮は、貞應元年二月十六日を以て、父貫名重忠の居館に生れたので、此の地は、

今の蓮華潭に切る。本尊は、十界の木像にして、水戸光圀の寄進したるものといひ傳へて居る。

○清澄寺

安房の國、天津町の北、清澄山の山頂前額にある古刹である。孝仁二年、寶龜二年の草創で。西の方、朝日の森と稱ふるところは、建長五年四月二十八日、日蓮こゝに登りて、旭日を拜したるところと言ひ傳へて居る。此の邊一帶、盛夏の頃といへども、蚊の聲を聞かず、實に清涼の氣、人に迫りて掬すべきものがある。

○鋸山日本寺

安房の國、鋸山の半腹にある。僧行基が、聖武帝の勅を奉じて、建

鹿野山 誕生寺 清澄寺 鋸山日本寺

立したるものにして、行基手づから佛像を刻し、これを本尊としたのである。山頂に登れば、十州の風光は、双眸の中に集り、山徑曲折の所、石彫の五百羅漢がある。今は、廢頽して其の數を缺くも、わづかに古昔の面影を留め、山麓保田より登ること二十餘町のところにある。

○船形觀音

安房の國船形村普門院大福寺にある觀音にして、仁明天皇の御宇、慈覺大師の草創したるものである。觀音堂は、峩々たる斷崖を截下げてこゝに構造したるものにして、其の本尊は、十一面觀世音で、むかし僧行基の石に彫刻したるものである。欄によりて、前面を望

めば、鏡が浦の碧波は、盆水のごとく、白帆の往來ふ状は、白鷗の飛ぶに似て、風景は、得も言はれぬ。

○那古觀音

安房の國の那古村にある。彌陀落山普門坊千手院那古寺と號し、元正天皇、養老元年の創建にして、僧行基の開基である。斷崖千仞、空元にして峙立し、其の頂上に蒼鬱たる松樹林がある。其の本堂は、恰も淺草觀音堂に髣髴たるもので、壯觀を極めて居る。其の彫刻の古雅なるに至つては、一見して驚歎せしめる。寺門の前から、眺望すれば、鏡の浦の風光は、枉席の下にありて、眞帆片帆のゆきこぶ状など、さながら此の寺のためにするものゝごとく思はれる。准合



道興の詠に、

那古の浦のきりのたえまに眺むれば

こゝも入日を洗ふ白波。

〇館山と北條

館山は、潮入川をはさんで、北條町と相對し、館山灣に臨んで居る。此の港は、安房第一の良港で、水深く、風を防ぐことが出来る。鏡の浦と名づくるのは、宜あることと思はれる。

北條は、鏡が浦の澳底にありて、水清く、波靜に、老幼婦女には、最も適當の海水浴場である。海岸の丘上に、公園ありて、園内の南に大日岩がある、其の形、富士山に似たところがある、脚底を穿ちて

此に大日如來の像を彫刻してある。こゝより瞰望すれば、鏡の浦の一碧、恰も池水のごとく、左方に當りて、遠く西に斗出するは、洲の崎といふのである。碧波に浮べるがごときものは、鷹島、沖の島である。風景の絶佳なるまた賞すべきか。

〇銚子

總武線の終點にして、市街は、利根の川口に臨み、附近に於ける一の要港である。陸には汽車あり、海には汽船がある。又利根川、霞が浦、北浦等への往復汽船の通へるありて、水陸交通の要衝に當つて居るので、市街は、大に殷賑を極めて居る。此の地より飯岡岬に到る海濱三里の間は、奇岩怪石突兀として、怒濤狂湧、其の脚を洗

ふて、白浪を飛ばし、遠く沖合には、白帆の點々として、白鷗の飛ぶがごとく、奇勝言ふべからざる趣がある。犬吠が岬は、銚子より東海に突出したる一大岬にして、岬頭に燈明臺がある。其の附近には岩礁多く、時としては船舶の難破するものがある。

○偕樂園

水戸にありて、常盤公園の稱がある。水戸市の西南十五町あまり。金澤の兼六園、岡山の後樂園と併せて、日本の三公園となへられて居る。弘道館の所在の公園を第二公園と稱へて居るので、此處を第一公園とも云ふのである。園内の廣袤約三萬坪、天保十三年、烈公の開いたものである。西方には、二層樓あり、好文亭と云ふ。

樓上を樂壽樓と名づけ、樓下の茶室を何陋菴と云ふ。梅樹は、此の園内に於いて、夙に名を博して居て、満開の候に至れば、遠く東京より杖を曳くものが多い。南に仙波沼の湖水を瞰下し、近くは櫻山に相對し、筑波、蘆穂の翠巒、一眸の中に收つて、眺望に富んで居る。第二公園は、停車場の北にあり、寒水石にて造りたる弘道館の碑は、八角堂の内にある。(上野より七十五哩)

○大洗

水戸市より三里。那珂川の汽船に乗れば、小時にして達す。海中に斗出する三町餘の岬角にして、海濱には、古松の横たはるあり。奇石怪岩の磊々たるあり。水清く海水浴に好適の地である。

萬代を松にちぎりてけふまでは、

子の日の松にひかれ來にけり。

とは、烈公の詠である。(同上)

### 三 近畿地方

#### ○琵琶湖

近江の中央にありて、湖畔の風光掬すべきもの少くはないが、其の最も現れたものは、瀟湘の八景に擬したそれで、三井の晩鐘、石山の秋月、粟津の晴嵐、堅田の落雁、瀬田の長橋、唐崎の夜雨、比良の暮雪、矢橋の歸帆即ち是れである。湖中には、小汽船の往來あ

りて、湖畔の風色を訪ふに便し、交通甚だ自在で、春夏の候、曳杖の人は、少なからぬといふことである。古人の自畫自賛に、四五條の横線を引いて、其の上に、

八景はかすみで見えずなりにけり

とあつたのは、いと面白い。(新橋より馬場まで三百十八哩、京都へ十哩)

#### ○石山寺

湖南瀬田川となりし水濱に在つて、巖々たる山腹に一大伽藍が、建立せられてある。本堂の傍より上りて、岩石の稍平かなる所に觀月亭と云ふがある。秋といはず、唯月に對すれば、其の風色の凡ならざる、他に多く求むべからざる絶勝と云はねばならぬ。紫式部の參

近畿地方

四六

籠らうして、源氏物語げんじものがたりを草ささしたと云いふ源氏げんじの間まと云いふがある。僅わづかに三疊さんたふ敷じきの薄暗うすくらい一小室せうしつで、窓高まどたかく、とても此こゝに寓居やうきよしたとは思おもはれなす。假托かたくの設せつであらうとのことである。林長老はやしちやうらうの吟詠ぎんえいに

秋風蕭殺天一涯。露滿四山不常霞。古木回岸寒月影。吟殘葉々

霧中花。

○唐崎の松

大津おほつより坂本さかもとに至いたる湖畔こはんにある。石いしを登たみて、一小地區ちやうちくを造つくり、湖こに臨のぞんで、三方小波ばうさなみに洗あらはれて居をる上に、千古ここのちの翠松すゐしょうは、傘かさのごとくに枝葉しえふを張はる、龍鱗地りゆうりんちに匍匐ほふくして、濶ひろさ數百步すうひゃくぼ、實じつに入景いけいの一たるを失うしなはない。天正十九年てんしやう大津城代新庄駿河守直頼ねんおほつじやうだいしんじやうするがのかみなほよりの裁うゑたものと

傳つたへて居をる。誰たれやらの句くに、

唐崎からさきの松まつは花はなより臙おぼろにて。

○堅田の浮御堂

近江八景あふみの所在しよざいは、遠とほく隔へだつたものもあるが、此この浮御堂うきみだうは、最も北きたに僻在へきざいして居をる。故ゆゑに入勝しやうさくを探さがらうとする人ひとも、多おほくは訪とはざるが多おほいやうである。琵琶湖畔びわこはんに臨のぞみたる一の堂宇だううで、湖中こちゆうに浮うかんで居をる様やうに見えるから、斯かく呼よぶのである。一條天皇でよてんわうの御宇ぎやう、僧惠そうゑ心の草創さうくわうしたるところで、海門山かいもんざんと號がうし、満月寺まんげつじと稱とへる。十間じゆんかんばかりの橋はしを渡わたつて、行いく様やうになつて居をる。

唐崎の松 堅田の浮御堂

四七

〇三井寺

大津の西に續ける長等山の半腹に位し、園城寺と稱へる。繪馬堂から湖中を望めば、白帆の白鷗のごとく往き來ふさま、沿岸航路の小汽船の煤煙を吐きつゝ、船首に白波を躍らせつゝ走れる、湖東湖北の翠岳、眠るが如く、湖光の山色、一眸の中に集り、眞に湖南の絶勝地と云ふも誣言ではなからう。寺は、後三條天皇の勅願にかゝり、延久四年の創立にて、西國三十三所の一に數へられて居る。裏坂の下口に、武藏坊辨慶の引きたりといふ巨鐘のある。辨慶は、比叡山の西塔に居たが、此の巨鐘を鐘樓から下し、其の龍頭を右手に擱んで、比叡山へ山越しに引摺つて行きかゝつたが、終に止めたと

の傳説がある。鐘の側面に岩石の道路を引摺つた痕が、明かに殘つて居る。辨慶如何に膂力絶倫とは云へ、此の鐘を引摺つて行くなどは、信じられないが、當時園城寺と比叡山延曆寺とは、反目の間であつたと云へば、多くの僧兵が、辨慶指揮の下に、幾らかの道路を引摺つたかで、其の痕跡かも知れない。又辨慶が、陣中にて、粥を炊いたと云ふ鍋がある。嬰兒の二三人は、浴することの出来る大さである。細谷離の吟詠に、

廢宮花可賞。古寺月相從。天濶北低浦。地回東簇峰。名傳三井水。聲絶一樓鐘。起得江勸詠。平波抱舊踪。

○日吉神社

比叡山の東麓に位し、大津から北方二里半で、境内は、頗る廣潤、老杉古檜、森々として天を蔽ひ、夏尙は寒さ感が起る。官幣大社で、例祭には、神輿唐崎の御旅所に到る例で、賽客の群集名状すべからざる有様である。昔傳教大師、比叡山に止観院を創めたとき、其の山神なる大山咋命を天台宗の守護神として祀つたのである。後、七社となつて、俗に三王七社と稱へる。山僧、事あるときは、日吉の神輿を引出して、朝廷に強訴するの亂暴を敢てし、白河天皇が、嘗て、天下に朕が意のこくならざるものは、加茂川の水、雙六の賽及び山法師との歎聲を發せられ給ふた其の山法師とは、即ち是れ。

○竹生島

琵琶湖中に位して、彦根から渡航するが、順路である。周圍十八町の小島に過ぎざるが、老杉古檜、蒼鬱として全島を被ひ、奇岩怪石、四表に削立して、實に天工鬼斧と云ふべき、奇絶は、口に言ふこと能はず、筆に書くこと能はざるもので、殆ど名状の語がない。湖光山色、四面映對、身は、畫圖中の人となつたかの感が起る。都久夫須摩神社及び寶庫がある。向山黃村が、

仙島太湖上。鬱葱佳氣浮。往還僅一日。身世雲孤舟。波浪鼉棒岳。凌雲蜃吐樓。自非嶺與阮。那得久淹留。

彦根から湖上六里内外(新橋より彦根へ二百八十九哩)

○義仲寺

馬場驛ばばえきの南三四町みなみちやうにある一小寺せうじで、源義仲みなもとよしなかを葬ほうむつてあるので、此この名ながある。壽永三年じゆえいねん、義仲よしなか、栗津あはづが原はらに戦死せんししたが、馬場ばばの一僧そう、小庵せうあんを結むすびて、こゝに葬ほうむつた。俳諧はいかい中興ちゆうきゆうの祖そ、芭蕉ばせをも此この寺てらに葬ほうむられてある。

木曾殿きそどのと背中せなかあはせの寒さむさかな。

の句碑くひがある。木曾將軍きそしやうぐんと芭蕉ばせを、其その對照たいせうは、いかにも面白おもしろい所ところがある。

○圓山公園

洛東八坂神社らくとうや さかじんじやの北東ほくとうなる一帯たいの山麓さんろくや稍高たかきところで、一大櫻樹たいめうじゆがあ

る。其その枝えだ四方はうに垂たれ、恰あたかも花傘はながさを開ひらいたやうで、花時くわじの眺ながめは、一入しほである。花はなの頃ころに至いたれば、附近ふきんに篝かきりを焚たき、花神くわしんの眠ねむりを覺さまし、遊人いうじんの心神しんくを酔よはしむるは、此處こゝである。是こゝは、古來こらい有名うめいなる祇園ぎおんの夜櫻よざくらにして、夜半人やはんひと去さらず、喧囂せんがうを極きはむ。其その北きたは山やまつゞきに圓山まゐ山やま鑛泉くわんせんがある。其その建築けんちくは、頗すこぶる廣潤くわうくわつにして、浴場よくぢやうその他たすべて、西洋風せいやうふうを模もし、清潔せいけつにして美麗びれいである。浴よくし終はつて欄頭らんたうに凭よるときは、京洛けいらくの全市せんしは、雙眸さうぼうの中うちに收おさまり、西北にしきたには、翠巒すゐらんの雲くもを掠かすむるなど、其その風光ふうくわうは、得えも言いはれぬ。(新橋しんばしより京都きよとまで三百二十八哩)

○伏見の稻荷

俗ぞくに伏見ふしみの稻荷いなりとはいへ、洛東らくとうにあつて、稻荷山いなりやまに倚よつて鎮座ちんざまし

義仲寺 圓山公園 伏見の稻荷

くたれば、斯く名づけたのであらう。稻倉魂命、素戔嗚尊、大市比賣命を合祀せる官幣大社である。和銅元年二月午の日、稻倉魂命、此の地より十八九町なる三の峰に垂跡したまひしが、社殿を造營した。後、永享十年、此の地に遷座したとのことである。境内は、山に倚つて、頗る廣潤、峯巒溪谷の間、幾百の末社を建立し、之れを巡拜するをお山巡りと稱へる。悉く一巡するには、殆ど一日を要するであらう。所々に清泉の湧出するありて、蕭洒なる茶亭の京都市を發揮して居るなど、憩ふに充分である。門前には、多くの茶店軒を並べ、伏見人形を販賣して居る。本社鳥居前には、東海道線稻荷停車場を置かれてある。車窓より明かに本社の一部を拜する

ことが出来る。(新橋より稻荷まで三百二十五哩餘)

惠慶法師が詠に、

いなりやまみづの玉垣うちたゝき、わがねぎ事を神がこたへよ。

○清水寺

洛東五條通りの東、清水坂の上に位し、山に倚り、河を瞰て、形勝の地である。延暦二年、僧延鎮、坂上田村麻呂と謀つて、堂宇を草創し、これを北観音寺を號した。後更に田村麻呂の修築を経て、殿堂壯觀を極め。本堂は、境内の南方にあつて、懸崖に架し、其の前に舞臺を築いてある。此に登りて眺むれば、京都全市を脚下に瞰望し、遠くは舞河泉の峰巒をも双眸に收むることを得べく、風光快



豁、得も言はれぬ。音羽の瀧は、岨下に下りたる所にありて、三條の懸泉、清水を迸出し、三丈餘の高きより孱湍として落ちてゐる。夏時浴せざるに、肌の粟を生ずるを覺ゆる幽邃、仙境である。門外の兩側には、清水焼を嚮ぐ家が少なくない。細谷離の詠に、

雨香清水寺樓間。約略風光滿此山。別有櫻花稱地主。春天故使

客來觀。

○通天橋

洛東々福寺にある一の建造物で、長さ一種の廻廊である。其の構造奇巧を極め、附近一帯は、山に倚つて、楓樹多く、新緑を賞すべく、紅葉を觀るべく、殊に滿山の秋葉錦を晒すに至つては、其の閑雅幽

邃、他に多く比類を求むることが出来ないであらう。東福寺は、慶長八年、九條道長の草創に成つたもので、聖一國師の開基である。古來七堂伽藍の巍々たるを以て、有名であつたが、惜しむべし、明治年間、二度の火災に其の過半を烏有に歸したることを、其の殘れるもの、一部分は、特別保護建造物となつて居る。

○金閣寺

洛北衣笠山の麓にある鹿苑寺内の一棟にして、庭園の中央に位し、三層の高閣である。閣畔に池あつて、名を鏡湖池と稱へ、池中には、奇石點々、水面を抽きて、兀立して居る。皆各々名稱を附せられてゐる。閣は、四壁天井ともに、みな金箔を張つてあるが、今は、金

通天橋 金閣寺

色燦爛たるものがない。されど、古雅の愛すべく、探るべきは確に一顧の價値がある。小丘に夕佳亭と云ふがありて、其の床柱は、南天の木の周圍八寸、違棚は、萩の枝にて作つたもので、古雅の愛すべきものであつたが、明治年間に焼失した。是は、足利義滿の山莊で、其の亭は、茶室である。茶の湯に用ひたと云ふ銀河泉と云ふものがあつて、清水が、湧出して居る。寺僧に請はゞ觀覽料を取つて、隈なく案内してくれる。且つ終には、一服の薄茶をも供せられる。

○嵐山

嵐山は、洛西第一の勝地である。山水の秀麗なると、櫻花の名所と

で、其の名は、夙に天下に響いて居る。昔は楓樹を以て、著はれて居たが、後嵯峨、龜山二朝の頃、吉野山より櫻を移され、之れより後、櫻花の名所となつた。天龍寺門前より松樹の間を行き、古の嵯峨野を歩みて、桂川の流に出でたらんには、山秀で、水清きを目前に見るであらう。翠嵐清溪、はや身は、仙境の人となるを覺える。有名なる渡月橋は、三軒家の下流より法輪寺の山下に架したるもので、一に御幸橋とも稱へる。其の上流三町に千鳥ヶ淵がある。戸無瀬の瀧は、山中にありて風光清絶、其の上に淺黄櫻の大樹がある。西方の山腹に大悲閣がある。其の西北の山麓に、鑛泉場を設けられてある。三軒家の沿岸から舟を浮べて、山水の勝景を探るものは、

此の鑛泉場を限つて居る。春陽の櫻花、初夏の新緑、晩秋の霜葉、  
 嚴冬の雪景、四季に佳ならざるは無い。實に天下無双といつても、  
 敢て誣言ではなからうと思はれる。京都驛の西、二里餘にあるが、  
 汽車に賃して、嵯峨で下車すれば、嵐山は、はや迎へて居る。明治  
 天皇の御製に、

大堰川うつるかげさへなかなぬ夜に月見てわたる橋もありけり。  
 又誰やらの句に、

花の山二町のぼれば大悲閣。

○宇治

宇治は、洛南の勝地で、宇治は茶所、縁所はさて措き、薰風一陣、

面を吹いて快哉を呼ぶ頃、村娘幾隊、紅の裾をひるがへし、桃色襪  
 に一様の扮装、一唱一歌、高低抑揚、日の斜なるを知らぬであらう。

山門を出れば日本の茶摘歌。

有名なる黄檗派の本山、萬福寺は、明の僧、隱元禪師の創建にかゝ  
 る所其の建築は、明代を表したるもの、特殊の趣味に富んで居る。

瀬田の手を打ちもたらされの螢かな。

宇治の流螢は、古來著名なる所、朝顔日記の所謂、一年宇治の螢狩  
 云々にても知られる。

鳳凰堂は、平等院にありて、八百五十餘年前の建築である。堂の全  
 景は、鳳凰の飛翔する状に象つたもので、中央の本殿は、其の體と

なり、左右の廊は、其の兩翼となつて居る。後の廊は、其の尾である。本殿は、重層をなして居るが、翼廊は、低く左右に伸びて、矩形となつて、其の隅角に樓閣を突起してある。其の形状構造、種々なる相異なりたる建物を配合して、しかも權衡と調和とを保たしめたのは、建築者の手腕の非凡なる所である。壽永の昔、源三位頼政が、軍敗れて、此の寺に入り、

埋木の花咲くことのなかりしに、

みのなるはてぞあはれなりけり。

の一首を残して、自刃したる扇の芝は、此處であらうかと思ふと、坐に涙を催した。(京都より宇治驛へ九哩)

○洛北の三尾

高尾、楨の尾、拇の尾、これを三尾といふのである。清瀧川の溪に沿ひて、少しく上るときは、山中楓樹の最も多き所で、溪の兩岸は悉く楓樹ならざるはない。道路の岐れたるを右すれば、神護寺に至り、左すれば、紅葉屋の割烹店に至るのである。神護寺は、和氣清麻呂の草創で、初め神願寺と稱へたが、淳和天皇、これを僧空海に賜ひ、神護國祚眞言寺と改稱した。樓門の下方に額書石と云ふがある。空海が、清瀧川の暴漲したるとき、川を隔て、向河岸に立てた額に筆を投じて、書いたとの俗説がある。奥の地藏院は、此の山中第一の絶景で、筆叙すること能はず、畫えかくこと能はずとい

ふほどで、高尾に來遊するものは、此に來ないものはない。なほも清瀧川の流に沿ふて上れば、槇尾の西明寺に至る。此の寺は、空海の法弟、智泉法師の開基したところで、楓樹は、多からぬが、樹木蒼葱として深邃の地である。亦以て景勝幽雅の一區たるを失はぬ。西明寺から對岸に岸に沿ふて上れば、五六町にして、白雲橋といふがある。古、此の橋畔に山門の有つたことは、古書に著はれて居るが、今は、其の殘礎さへもない。これより八町ばかりを上りたる所に一の精舎がある。高山寺と云ふのは、これで、嘗て明雲上人の住するところである。楓樹最も多くして、秋霜に飽くの頃、清瀧川の清流に映じて、水將に燃えんとするの趣がある。即ち梅尾は、

此の地で、これから奥は、此までの勝景はない。京都驛より西北約三里半の處にある。

伊藤維楨の高雄を詠じて、

猩空鮫絹錦掛紅。峰巒回合梵王宮。無人收拾好風景。滿眼霜楓

落日中。

又原桃葉、槇尾山に登ての吟に、

白雲埋路幾重重。門外寒流石上松。相鳥相呼山更靜。老僧傳鉢

下孤峰。

○東山

蒲團着て寝たる姿の東山は、京都市東方一帯の山で、北は、如意が

岳だけから南みなみは、稻荷山いなりやまに至いたるまで、三十六峰ぼう、其その優やさしき山やまの姿すがた、京都きやう都とを代表たいひやうせるものかと思おもはれて、何なんとなく從順じゆうじゆんに見みえる。故ゆゑに絶たえて峻岨しゆんその状さまはない。山やまの半腹はんぶくより麓ふもとにかけて、幾多いくたの世よに聞きえたる勝地しょうちの相連あひつらなり、巡遊じゆんいゆう數日すうじつを重かさぬるも、尙且なほつ足たらないのである。知ち恩院おんゐん、清水寺きよみづでら、大佛だいぶつ、三十三間堂げんだう、八坂神社やさかじんじや、東福寺とうふくじ、南禪寺なんぜんじ、春蓮院しゆんれんゐん、西大谷にしおほたに、黒谷眞如堂くろたにしんにやだうなど、中々なかに多おほい。

○比叡山

山城やましろ、近江あふみの國境こくきやうに跨またりて、京都市きやうとしの東北とうほくに巍然ぎぜんとして聳そびえてゐる。高嶺かうれいである。山巔さんてんに延曆寺えんりやくじといふあがつて、殿堂でんだうは、實じつに壯嚴さうげんを極きはめたものである。又別またべつに無動寺むどうじといへるありて、眼下がんかに琵琶湖びばこを瞰かん

○八瀬の里

望ぼうせらるべく、沿岸えんがんの風光ふうくわうは、悉ことごとく雙眸さうぼうに收おさまり、風光明媚ふうくわうめいびの幽境ゆうきやうである。山中さんちゆう最も高峻かうしゆんなるは四明しめいが岳だけといつて、海拔かいばつ二千七百餘尺よしやく、天氣てんき清朗せいらいのときは、中國ちゆうごく、四國しこくの峰巒ほうらんを雲煙うんえんの中うちに望のぞむことが出來できる。盛夏せいしかの頃ころに至いたれば、外國人ぐわいこくじんの此こゝに來きたりて、天幕テントを張はりて、避暑ひしよするものが、頗すこ多おほい。是こゝは、旅舎りよしゃが無ないからである。誰だれやらの句くに、叡山えいざんにのぼりて、此處こゝが、近江あふみと山城やましろの國境こくきやうなりといひたるに、さらばとて、

我が足あしに二つの國くにを踏ふんばりき。

書題ぐわたいに取とられ、詩しに吟ぎんせられ、和歌わかに俳句はいくに、いづれも古來こらいより著あら

れたる所にて、地は、比叡山の山麓に位し、これより北、大原に至るまでの間の女子は、脚絆をはき、手甲を穿ち、梯子、横槌、さては柴、薪などを頭にいただし、京都の街に出で、鬻ぎ、歸途己が需要品を購ふと云ふ、所謂大原女はこれである。

大原女や蝶の出で舞ふ八瀬の里。

昔、天武天皇、大立皇子とたゝかひて、敗れたるが、此の地に隠れたりしに、皇子は、これを射たが、矢、其の背に中つて崩せられた。よつて矢背の里と名づけたが、何時の頃よりか、八瀬と書く様になつたとのことである。京都の北四里ばかりの所。

○愛宕山

洛西嵯峨の上方にあり。一の鳥居より五十餘町を登るときは、白雲峰頭に達するのである。山上に神社がある。名蹟としては渡猿橋、日暮しの瀧、試嶺、南星が峰、檜が原などがある。眺望の佳なるは、言はずもがな。むかしより此の山中に、土器投の遊戯あつて、土器を取つて、これを空中に抛てば、飄々として風に從ひ、恰も飛鳥のごとく、やがて深谷に落下するもので、佳興を催し趣味がある。

破れたるか無事か土器今何處。

とは、古人の句である。

○保津川

保津川は、丹波より來たりて、嵐山の麓を流れ、大堰川となつて、

澱川に綜合するものなるが、其の上流、龜岡より船を備ふて下れば、奇岩怪石兩岸に突々屹立、且つ川の屈曲して、水流の石に激し、珠と散り、雪と碎けて、餘沫船中を襲ひ、船客をして心飛び、魂消えしむること幾回なるを知らぬ。されど、舟子は、舳艫にあつて、巧に岩石に衝突するを避くる其の操縦は、實に慣熟したるもので、船の若しも破壊又は轉覆するときは、奔湍に打たれて、水屑となるは、いと容易なることであらう。さるにても、快哉を叫びつい無事に嵐山の麓まで下つて來たのは、彼等舟子の功勞を多とせねばならぬ。舟子よ請ふ健在なれ。我れ再遊を期して、再び相會するの期を待たう、と云ふ感は誰しも興る。

保津川保津川として下りけり、とは誰の句?

○春日神社

奈良停車場に汽車を別れて、大路に出づれば、一路直通十數町の奥に春日神社、鎮座ましますのである。域内は、頗る廣濶で、老杉蒼鬱として、天を被ひ、背後の山は、深緑四時色を變へず、自から神さびて、神威の尊さを仰がしむる趣がある。官幣大社にして神護景雲二年の創建にかゝり、三十有餘萬坪の境内を有し、其の東北に四宇の正殿がある。一は武甕槌命、一は經津立命、一は天兒室根命、他の一は、姫神を祀つてある。一の鳥居を入りて、本殿に至るの間兩側には、無数の石燈籠相並んで其の數は、二千内外もあらう。社



殿の軒頭に釣れる金燈籠は、約一千にも餘つて居る。就中最も著名なるものは、蝸の燈籠、臥鹿燈籠、雲朴燈籠などで、其の數多なるに驚かざるものはない。雪解の澤は、神社の大鳥居の前より稍南したる細徑の傍にあつて、綠草は、瀾漫して緑の毛氈を敷き展べたるがごとく、所謂春日野の鹿は、其の間に起臥して、悠遊自適、其の愛すべきの趣は、他は安藝の嚴島ならでは見られない。賽客の後に従ひ來つて、食餌を求むる状は、實に愛すべきものである。

けふまつる三笠の山の神ませば、天の下には君ぞさかえん。

とは、範水の詠である。

○春日山と三笠山

春日山は、春日神社の上方に聳えたる山で、三つの峰頂に別れて居る。本宮岳、水屋峰、及び高峰、即ち是れである。此の三峰は、層疊して松杉蒼鬱、常に深緑を變へず、奈良市街の風致に幾層の趣を添へて居る。三笠山は、古來其の所在について、紛々として決しないやうである。春日山のことといふのと、嫩草山であるとの説とである。されど、貝原益軒翁の大和巡りには、春日神社の背後の山は、これであると斷言してある。されば春日山といふのであらう。

わたの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも。

是は、安倍仲麻呂によつて、世に著名なるものである。(京都より奈良へ二十六哩)

○嫩草山

一に鶯山また手向山とも稱へる。春日山の西北に隣れる山にして、春日山は、樹木蒼鬱、深緑に富みて、壯嚴犯すべからざるの概あるが、此れは、満山みな緑草で、恰も翠顛を展べたるが如く、其の對照點映の宜しきを得て、最も優美に、親むべきの雅趣がある。高さ一千二百餘尺にして、山容三層に分れ、登るに従つて、風景は、次第に大きく、大和の平野、山城の連山、皆一眸の中に集まつて来る。此の山は、元來興福寺、東大寺の境界であつたが、所屬の事ありて、争を生じ、終に東都五大寺の預りとなり、雙方立會ひて、其の樹木を焼き拂ひ、和解したるよりして、これが例となりて、今に至るまで

毎春嫩芽の萌出づるに先きだつて、満山を焼くことゝなつて居る。

勢語に、

武藏野は今日はな焼きぞ若草の

つまもこもれり我もこもれり。

とは、是れである。其の頂上に鶯陵あつて、一に、牛塚ともいふ。塚の側には、埴輪の露出して、今なは其の破片を得ることがある。山下は、武藏野といふのである。山麓の通路に角細工、筆墨、刀物など、奈良名産を販賣する家が、軒を並べて居る。

○猿澤の池

奈良市の殆ど中央、興福寺の塔下に一碧を凝らすものは是れである。

嫩草山 猿澤の池

是は、もと興福寺の境内であつて、天竺の彌猴池を摸したるもので、其の名稱を通俗ならしむるがために、斯くは呼びなせるものであると。周圍百八十五間、池中に鯉魚が多い。池畔に衣掛柳と稱へる柳があつて、名を知られて居る。むかし、宮女采女といへるもの、恩寵の衰へたるを嘆じ、此の池に身を投じたるが其のとき、此の柳に衣を掛けたるによつて、此の名を得たのである。されど、當時のものは、いつしか枯死し、今有るものは、後世更に植えたるものと傳へて居る。細谷張菴の吟詠に、

薄命美人嘆。出投宮畔池。鹽池懷舊事。堤柳尙垂絲。

○奈良の大佛

東大寺の本尊にして、殿堂の高さ十五丈六尺、東西二十九丈、南北十七丈、大佛の像は、金剛盧舍那佛の座像で、高さ十五丈六尺、實に巨大なるものである。抑も此の像は、天平十五年、聖武天皇はじめて、僧行基に勅して、普く天下の衆展に勸進せしめて、之れを鑄造せしめたが、出来なかつた。改鑄八回にして、漸く成功したこのことである。當時の原料として、舊記の録するところを見るに、熟銅七千三萬九千五百六十斤、銅五萬八千六百二十兩、白錫一萬二千六百三十八斤、煉金一萬四百三十六兩の多きを費して居る。其の鑄造に用ひたる炭は、實に一萬六千三百五十六石と云ふに至つては、驚かざるを得ない。これによつて、其の偉大なりしかを推知すること

が出来る。

金仙東渡變銅仙。欲渡衆生高聳肩。輸却洛陽新巨佛。捨身散作

萬文錢。

○長谷寺

長谷寺は、大和櫻井停車場より自働汽車に乗れば、僅に十五六分にて達することが出来る。汽車を捨て、町に入れば、兩側は、人家軒を並べ、爪先上りの道路にて、其の行き詰めたる所にある。石階十數級を上つて、門を入るときは、はや長廊に迎へられる。長廊は、石階の上に構造したるもので、一段數十級、すべて三段に屈折して本殿に連り、其の兩側には、滿地ごとく牡丹を栽る、花時の艶麗

實に言ふべからざる美觀を呈する。本堂は、明治年間の建築なるも、すべて舊記に則りて、結構壯麗を極めて有る。背後の初瀬山は、古來櫻の名所として、吉野と並び稱せられて居たが、今は、僅に其の名残を留むるのみである。

○吉野

歌書よりも軍書にかなし吉野山

とは、古人の名吟、實に然りと云はねばならぬ。此に至るには、四條の路がある。一は、多武の峰より細嶺を踰えて、上市に出づるもので、最も險惡である。二は、高取山の東を通過するものにして、芋が嶺越といふもの。三は、八木街道より到るもので、蘆原嶺越と

長谷寺 吉野

七九

いふもの。四は、戸毛より蘆原嶺の西なる車坂を踰え、吉野川の北岸下淵を越て、六田の里に到るもの。此の四つであるが、最後に記したるものは、吉野口停車場よりする道にして、略人車が通ずる。六田より坂路に掛れば、一町ごとに石標を立て、其の行程を明記してある。二十町を登れば、道路の両側に老櫻の樹が多い。これを長峰の櫻といふのである。これより更に十町を登れば、千本の茶屋がある。一目千本といへるは、此處である。山谷を俯瞰すれば、満目ことごとく櫻樹ならぬはなく、満開の頃は、白雲靄靄、風色の勝れたる喩ふるに物が無い。又上市の方面より登るものは、四手掛神社を右方に拜し、七曲阪に至れば、櫻花特に多い。此の邊の眺望を日

本が花と名づけられてある。かくて、三十二町目の辻にて、六田より来る道と相合し、進んで三十三町目に達するときは、一の橋がある。過ぎて黒門がある。これは、吉野町の總門にして、之れを入れば、十餘町の間、民家は、兩側に櫛比し旅亭、産物販賣店等が、最も多きを占めて居る。これを過ぎて、漸く登れば、藏王堂、東南院、勝手明神、竹林院は、右方に、吉水院、如意輪寺などは、左方に望まれる。天王橋を過ぐれば、此の邊また櫻樹は最も多い。奥の千本とは、此處を云ふのである。なほ登れば、道は、左右に岐るゝが、右して登るときは、狹隘にして峻しく、夢違觀音堂、禪定寺、大將軍社などの趾があり、佐藤忠信が、其の主、義經に代つて、防戦

したる地は、此の大將軍社の上うへにありて、花櫓はなやぐらといつて居る。其の上うへは、義經よしつねの潜伏せんぷくしたる所ところなりと傳つたへる。なほ登のぼりて子守社こもりしゃを過ぎ、金峰神社きんぼうじんしゃを経て、奥おくの院いんの茶屋ちやに至いたる。勝手明神社かつてみやうじんしゃより五十町ちやうである。道路だうろ又分岐またぶんきして、右みぎすれば、山上さんじやうが岳だけに上のぼるべく、左ひだりすれば、四五町ちやうにして苔清水こけしみづに達たつし、それより二町ちやうばかりにして、西さい行菴ぎやうあんに到いたるので、吉野遊覽よしのいうらんは、概ね此處おほむこを以もつて、最終さいしゆとしてある。藏王堂ざうわうだうは、吉野の町まちの中央ちやうわうにありて、高師直かうのちのち、師泰等しやすら、南朝なんてうの行宮あんぐうたる吉野よしのを攻めたりしとき、これを焼やいたが、後秀吉のちひでよしの再興さいきやうせし所ところ、堂前だうぜんに四本の櫻さくらがある。此の樹下じゆかに於おいて、護良親王もりながしんわうが、舞樂ぶがくを奏そうし、酒宴しゆえんを開ひらかせたまひたる舊跡きうせきがある。吉水神社よしみづじんしゃは、藏王堂ざうわうだうの南

にあり。はじめ吉水院きつすゐいんと稱となへて居たが、明治七年めいしちねん、神社じんしゃに改あらため、後醍醐天皇だいてんわうを祀まつつてある。天皇嘗てんわうかつて此處こゝにましくて、花はなにねてよしや吉野よしのの吉水よしみづの、枕まくらの下したに石いしはしるおと。の御製ぎよせいを遺のこしたまひたる所ところ。かへらじとかねて思おもへば梓弓あづさゆみ。なきかすに入いる名なをぞといひむる。の一首しゆを矢やの根ねに書かかしめたる如意輪堂にょいりんだうは、勝手明神かつてみやうじんより七八町ちやうにありて、正行まさつらによりて、其その名著なあらはる。其その警塚もとやうづかは、後醍醐天皇だいてんわう塔尾たふのをの御陵ごりやうの下したにある。吉野よしのは、名勝めいしやうの地ちと、もに、南朝なんてう五十餘年よねん

の皇居の地である。故に舊蹟の訪ふべきものが、少くない。

五十餘年亂若麻。南朝偉業附僧家。山櫻無語尙含恨。不肯向北

一風發花。

これはくくとばかり花の吉野山。

古今の吟詠少くない。(京都より吉野口へ奈良縣を経て、約五十哩)

○月が瀬

月が瀬は、大和、伊賀の二國に跨り、三郡十數ヶ村に亘る一大梅林にして、大和に屬するものは、尾山、石打、長引、桃が野、月が瀬、廣瀬、遅瀬、嵩の八ヶ村。又、伊賀に屬するものは、白檜、治田の二ヶ村なるが、其の最も勝景に富んで居るのは、尾山、桃が野、及

び月が瀬などにして、伊賀上野驛より二里ばかり西するときは、白檜村に達する。即ち梅溪の入口である。尾山村の小高き所に一目千本として、最も風光に富んだ所がある。此に登臨するときは、名張川の清流をはさみて、起伏する高低は、眼界の及ばん限り、ことごとく梅溪ならざるはなく、香雲世界の絶勝、得も言はれぬ。若しゆるく、これが奇勝を探らんとせば、舟に棹して、名張川の清流を溯りつ、兩岸を眺むるときは、其の風致は、とても筆に盡されぬ。月満ちて、中天に明鏡のかゝる夕、山水ともに浮動するの奇觀は、他に見られぬであらう。月が瀬の名は、蓋しこれより出たのであらう。これより奈良に出やうとせば、上野の次驛、島が原に出るべく、

木津川の勝を探らうと思はれ、島が原の次驛なる大河原に出づるの  
が順路である。(京都より上野へ三十餘哩)

吹く風に月が動くか梅の花。

○笠置山

地は、勝景に富み、史上に悲しき跡を遺せる地とて、夙に人口に膾  
炙して居る。笠置驛の東二町、元弘の亂に、後醍醐天皇の蒙塵した  
まひしが、北條氏の惡逆無道、終に笠置の行宮を落したので、天皇  
は、准后藤房と、もに難を避けたまふたが、

さして行く笠置の山をいでしより、

天が下にはかくれ家もなし。

との御製に御歎きあらせられたが、終に逆臣に捕はれたまふた。山  
麓に露出する巨岩に『行在遺趾』の四大字を彫りつけてあるが、これ  
は彰仁親王殿下の御染筆である。(京都より笠置へ二十九哩)

○大和三山

三山の名を聞くだに、昔の偲ばるゝところで、名にし負ふ歌人は、  
皆此の間の風色に親しんだものである。大和にある一の小山に過ぎ  
ないが、古來著名となつて居る。耳無山は、俗に天神山又の名を梶  
子山とも呼ぶ。孤峯ゆたかに田圃の間に特立して居る。其の側に畝  
傍山ありて、一に慈明寺山とも稱へる。次に天香久山があつて、こ  
れを三山と云ふのである。



富士谷成章が、

神代よりかけてぞしのふたま櫛

畝傍の山をけふし見つれば。

萬葉集に、

春すぎて夏來にけらし白妙の、

ころもほすてふ天の香久山。

今古集誹諧歌に、

耳なしの山のくちなしえてしかな、

思のいろの下染にせむ。

○法隆寺

此の寺は、法隆寺驛の北十二町の處にある古刹で、其の金堂は、特別保護建造物となつて居る。推古天皇の御宇十餘年の日子を積んで、造營したる大伽藍にして、中門、金堂及び塔は、尙は當代の偉觀を留めてある。金堂は、初め丹碧の光彩陸離たるものであつたが、幾度の修補によりて、今は、其の條を留めて居らぬ。境内の夢殿は、金堂とともに著名の建造物に數へられてある。(大阪より法隆寺驛へ十八哩餘)

○高野山

高野口驛より四里内外に過ぎざるも、山路は、其の大半を占むるものなれば、僅に二人挽の腕車を通ずることが出来るのみである。其

法隆寺 高野山

の路は、大門口、不動坂口、熊野口、龍神口などあるが、高野口よりすれば、學文路村より不動坂に達し、一心院谷に入るが順路である。されど嶮路なれば、慈尊院に迂回し、天野に出で、花坂を上れば、さまでの嶮路ではない。慈尊院より壇上寺までは、一町ごと町卒塔婆として、石にて造りたる方一尺、高さ一丈一尺の石標を立て、道しるべとしてある。大門口は、西方に在る入口の樓門にして、建坪百二十餘坪。其の左右に立てる金剛力士の像は、長一丈六尺、法橋連長の作である。大門口より二十五町ばかりに金堂がある。是に至るまでの間には、兩側に寺院並列して、其の間には、肆店が交はつて居る。灌頂堂、御影堂、准胝堂、三昧堂、孔雀堂などありて、

すべて此の所を壇上と總稱して居る。これより二町ばかり東に當山の本坊金剛峰寺ありて、勅使門の雄麗、殿堂の宏壯と相待つて、其の建築物は、後世に誇るに足る。關白秀次の生害したるは、此の寺である。これより八町ばかり進めば、大橋がある。一の橋と稱へる。これより二十町ばかりの間、路の左右は、ことごとく皆墓碣にして、其の數の多きこと、測り知られぬほどである。芭蕉の碑には、父母のしきりにこひし雉子の聲。の一句を彫りつけられてある。かくて大師の廟の前に、御廟の橋があつて、長さ四間四尺、幅五間五尺、其の橋板は、三十七枚にして、金剛界の三十七尊に配したるものと傳へて居る。空海が、

忘れても汲みやしつらん旅人の

高野の奥の玉川の水。

と詠まれたるは、此の橋の架つてある溪流である。昔、秀吉、天下を一統したる後、此に参拜したが、罪障の深いものは、渡られぬと空海の戒められてあることを思ひ浮べて、流石の豪傑も、躊躇して渡らず、夜窃に應其上人に導かせて渡つたが、何の故障もなかつたので、翌日衣冠束帯にて、堂々と渡つたと云ふことである。されど今は、婦女に戯れつゝ舞踏して、渡ると云ふ状で、世態の變が、推し測られる。橋より數十歩の處に燈籠堂がある。中には、萬燈晝夜の別なく、煌々として燃えて居る。これに面して廟所がある。甚だ

質素の建物である。そもく高野山の畛域は、頗る廣大なるもので、到底小冊子の盡さるゝところでない。況んや其の他に於いておやである。(大阪より高野口へ和歌山經由六十四哩)

○和歌浦と紀三井寺

和歌山市の南一里餘の海濱で、和歌山市驛より電車が、往復して居る。東照宮は、日光を模したるもので、規模は、極めて小さいが、能く似て居る。其の山頂より望めば、灣内の風光は、手に取るがごとく、實に明光浦の名を辱めない。それから汀に出づれば老松一帯、長く南に斗出し、男波、女波の寄せては返す状いと静である。これより石造に成れる奇橋不老橋を過ぎて、三斷橋を渡れば、一の岩山

にして、妹背山といふのである。其の前に水中に枕んで、一の樓閣がある。これを觀海閣と稱へる。其の前に海を隔て、山上に見ゆる白聖は、紀三井寺で、西國三十三所の第二番に數へられて、古郷やはるぐこゝに紀三井寺

花の都もちかくなるらん。

との法の歌のある所。三斷橋を戻つて、山の間に入れば、玉津島神社がある。攝政前太政大臣が、

いかばかり和歌の浦風身にしみて、

宮はしめけん玉津島姫。

崇徳院の御製に、

過ぎがてに見れどもわかぬ玉津島、

こへこそ神の心とめけれ。

紀三井寺は、名草山の半腹にある梵刹にして、此に登臨するにあらざれば、到底和歌の浦の風色は、語ることが出来ない。此は、和歌の浦の、風色を一眸の中に收むることを得るのであるからである。

(大阪より四十哩)

○濱寺公園

濱寺は、もとの高師の濱で、和泉の堺から南方、電車に賃すれば、僅に數分時にて達することが出来る。

名にし負ふ高師の濱の仇波は、

文行紀代現

かけしや袖のぬれもこそすれ。  
 との古歌の所である。幾百年を経たらんかと思はる、老松は、臥龍  
 のごとく、翠葉、四方に蔓りて、白砂と相映じ、細漣は、汀にさら  
 しくとして、婦女老幼の水浴には、最も好適の場所である。是は、  
 茅停の海に臨んであるからで、茅停の海は、西は、明石海峡を限り、  
 東は、紀淡海峡に扼せられたる一大湖のごとく、波静かに、風光の  
 明媚を以て、稱へられて居るところである。  
 沖の浪たかしの濱の濱松の、  
 名にこそ君をまらかたりつれ。  
 とは、紀貫之の詠まれたるものである。

○妙國寺の蘇鐵

大阪の南三里に堺の市街あり、其所の妙國寺は、古來蘇鐵を以て、  
 遠近に聞えて居る。本堂の裏手、潜り門を入れば、夙に其の名のみ  
 びきたる蘇鐵がある。幹の高さ二丈餘、すべて二十三四幹ありて、  
 二丈數尺に蔓つてゐる。年を経ること四百餘年と云ふが、いかに  
 も左様であらうと思はれる。翠色滴るがごとく、壯觀は、實に得  
 も言はれぬ。

むかしより植ゑけん時は知らねども、  
 いやしげりたるくるがねの枝。

文行紀代現

○住吉

大阪難波驛より南方三哩半を隔てたところに、官幣大社住吉神社が、鎮座ましくして、千木高く、神威のほども拜せられる。底筒男命、中筒男命、表筒男命の三神を祀り、別に神功皇后を祀つてゐる。大鳥居を入れば、一條の賽路、半月形の反橋を通じて、社殿の前に導いてゐる。本殿の構造は、最も古雅にして、自から神威の高きを感じしむることがある。境内廣潤、古松多く、地は白砂にして清潔である。返りて鳥居を背後にし、鐵道線路を越えて、海邊に行けば、俗に所謂高燈籠として、一の常夜燈がある。高さ十數丈、こゝに登れば、北に大阪の市街を望み、南に、堺市の麓をならべたるが見える。

西は、茅葺の海に接して、雨煙糶糊の間に中國、四國の山々が望まれる。實に風光絶佳、半日の清遊を試むるに好適地。

○道明寺天神

河南鐵道は、大阪の南端、汐見橋驛より起れる高野鐵道線、柏原驛より分岐したるもので、其の柏原で下車せば、數町の處にある。土師神社と號し菅原道真、天穗日命、御姥菅原命を合祀してゐる。道真の伯母覺壽尼、かつて此の里に住んで居たが、道真、讒に逢ふて筑紫に謫せらるゝや、此處を過ぎて訪ふた。後三年を経て、筑紫に薨じたが、天曆九年、京師北野に天満宮を建て、公の靈を祀ると同時に、此にも一社を創建し、土師の社にありし二神をも合祀した

住吉 道明寺天神

九九

のである。(大阪より柏原へ六哩、道明寺へ八哩餘)

○信貴山

信貴山は、大和、河内の國境に峙立する山で、大阪よりすれば、八尾驛にて下車し、奈良地方よりすれば、王寺驛にて下車し、それより徒歩せねばならぬ。王寺から登るには、龍田と立野との間、勢谷と云ところからするので、坂路は、一町ごとくに、石標を立て、三十町にして、山門に達する。朝護國孫子寺信貴山觀貴院と號し、本堂は、山中の高處にありて、毘沙門天を安置してある。賽客常に絶えぬところである。行く／＼眺望を擅にすることを得て、登るに従いて、眼界は、ますます／＼宏豁となるので、坂路を登る勞は、殆ど

忘れてしまふ。(大阪より八尾へ六哩、奈良より王寺へ十三哩餘)

○男山神社

此の神社は、俗に男山八幡宮と稱へて、古の所謂石清水八幡宮にして、曆代の崇敬淺からぬ神社である。地は、山城に屬するが、南に僻在して居るので、汽車に依れば、關西線の長尾にて下車し、それより約二里。又京阪電車に依れば、其の麓に停留場が置かれてある。祭神は、應神天皇、神功皇后、玉依姫にて、貞觀年間、南都大安寺の沙門、行教といへるものが、勅許を得て、勸請したるところである。山麓より山上に至るまで、名勝古跡、中々數へ盡くされぬ。神殿には、本造の瑞籙を廻らし、其の腰部以上は、組格子となし、

信貴山 男山神社

花鳥を彫刻し、ともに五彩を施し、金銀を鏤めれば、壯嚴にして雄麗なること、名状すべからざる趣がある。山上より目を放てば、淀川の清流は、帯のごとく、攝河泉の峰巒は、波浪のうねりのごとく、一望際涯なき平野は、脚下に展開して、農耕の利を興ふべく、實に得がたい形勝の地である。龜山上皇が、國難にあたりて、祈りたまふたのは、即ち此の神社である。(大阪より長尾へ十七哩)

○四條巖神社

四條巖驛より約八九町、別格官幣社にして、楠木正行を祀つてある。社殿は、飯盛山の中腹に拓きて建造し、こゝに其の靈を祀つてある。又驛から西北三町に其の墓地がある。碑の高さ三丈五尺。又神社の

南十町に正行戦死の跡がある。是れ正平年間、弟正時とともに、賊將高師直と奮戦したるところである。當年を追回せば、誰か逆賊の行爲に裂皆せぬものがあらうぞ。(大阪より九哩餘)

○繪島

繪島は、淡路國津名郡に屬する一小岩嶼で、高さ十間、周回四十餘間、其の岩石は赤き所、黄なる所、青き所、黒き白き所など、斑點の巧、實に麗しい。岩頭に一松ありて、海風に撓められ、枝を蔓らせたる其の絶景は、實に言ふべからざる眺である。日本書紀、神代の卷にいふところの礪廬島とは、これである。明石驛よりせば、海上二里餘にして、達する。(大阪より明石へ三十三哩)



○寶塚鑛泉

大阪停車場より箕面電車に乗つて、約五十分内外北に馳せたならば、武庫川の沿岸に出る。即ち寶塚鑛泉の所在地にして、川の西岸は、旅舎十數戸、山涯に凭り、又流に枕んで、建設せられてある。鑛泉は、川の岸に湧出するので、一大浴槽を湛えて、温めて浴せしめて居る。近頃三十萬圓を投じて、新築したる大理石造の浴場があるが、浴悪極まるものである。夏時は、武庫川原の礫に照りつける炎日の反射して、逆旅の椽側に出でては、中々に熱い。蓋し避暑地でないことは、豫め知るべきである。

○箕面山

前記の電車鐵道に乗つて、岡町で、寶塚行と別れて、櫻井の一驛を経て、箕面に着くのである。溪谷に沿いて、淙々たる音を聞きつゝ、十七八町ばかり、爪先上りに上つて行けば、其の道路は、ことごとく幾百年も経たらんと思はるゝ老樹の楓にして、天日を蔽ふて、晝なほ晦い所がある。其の道路の窮まつたところに箕面の瀧が、懸つてある。高さ十二丈、幅二丈、直下の狀、筆舌の及ぶところでない。満山の楓樹、新緑、霜紅ともに佳、且つ其の境の幽静閑雅の勝區なれば、足一たび此に入つたならば、神氣爽然、身は、畫圖の人となつたかと疑はしめる。此の地へ近年一大動物園を設けられたが、山に跨がり、谷を踰え、湧泉屢涸として所々に噴き、種々の動物を

寶塚鑛泉 箕面山

飼養して居る。其の規模の宏大なること、實に驚くばかりである。梁峽巖の詩に、

界破青松疊石湍。耄夫漫作廬山看。却羞白髮三千丈。坐嘯天風六月寒。

○有馬温泉

阪鶴線生瀬驛にて下車し、これより新道二里半を車行せば、途中の風光を賞しつゝ達する。もし健脚の人ならんには、住吉驛にて下車し、六甲山の山腹を繞り、愛宕山の麓を経て、行くが興味多からう。温泉は、鹽類泉にして鹹味を帯び、茶褐色を呈して居る。浴槽は、概ね外にありて、旅舎より通ひて、入浴する様になつてゐるが、別

湯、並湯の區別ありて、別湯に入れば、獨占すると同じことである。南の方八町に鼓の瀧がある。奇巖にかゝつて、直下十餘丈、頗る奇觀である。川を隔て、西に聳えたるを落葉山といつて、四時の風光に富んで居る。その他附近に、名勝が少なからぬので、旬日の入浴も、左まで飽くことを知らぬであらう。細谷離の吟詠に、

記得明皇事。驪山尙宛然。温泉唯療疾。未見作神仙。

又別に神戸から行く道もあるが、婦女子には、少々無理であらう。(大阪より生瀬へ十六哩、住吉へ十七哩)

○摩耶山

神戸市の背後に聳立する一の高山である。此に登らんとするには、

有馬温泉 摩耶山

布引の瀧の麓から、右に折れて、熊内を過ぎて、一里ばかりにして達する。數百級の石階、層々相重なり、之れを登り果てたならば、頂上に天上寺と云ふがある。大化元年の創建にして、法道上人の開基である。茅渟の海を眼下に瞰望し、牛の臥したるがごとき淡路島山は、手に撫づるがごとく、遠くは紀和の峰巒、蜿蜒として綿空する状、汽船の黒煙を吐きて奔る状など、實に一幅の大畫圖を展べた様である。(大阪より神戸へ二十三哩)

○布引瀧

神戸の隣驛三宮驛より十六七町にあり。小溪流に沿ふて、歩を進めたならば、布引山の木立の漸く深き處、積翠を破つて、落下するこ

と七十餘尺、これを雌瀧と稱へる。その前に一の長廊を架して觀覽の便に供してある。これより更に三丁ばかりを登れば、雄瀧が、懸つてゐて、銀河の九天より落つるがごとく、頗る雄壯である。松間よりは紀の海、淡路島山などが望まれて、風色捨てがたき趣がある。此の水は、神戸市の水道の源泉となつて居る。

白露とよそには見えし布引の、瀧のひびきは世に聞えけり。

○須磨

須磨は、古來歴史上著名の地として、將た、風光明媚の地として、其の名は、夙に喧傳せられて居る。東須磨、西須磨の海濱一帶の總

布引瀧 須磨

近畿地方

稱で、白砂青松、長汀に連り、前には、近く淡路島山を眺め、遠くは阿波、讃岐、紀伊、和泉の翠嶺を望み、白帆點々、波上に隠見し、春夏秋冬其の景致を異にし、水清く、空氣潔き土地とて、保養地として、最も適當といはねばならぬ。(大阪より須磨二十七哩) 藤井啓の須磨浦の吟に、

行盡攝山望播山。貪程夕過亂松間。一聲漁笛不知處。月白須磨灣又灣。

○須磨寺

西須磨にありて、福祥寺と稱へる。停車場より北の方八町、仁王門を入りて、約一町餘にして、本堂に達する。光孝天皇、仁和四年の

創造にして、開鏡上人の開基にかゝるのである。寺寶としては、敦盛の持ちたりし青葉の笛、敦盛自筆の短冊、辨慶の筆櫻の制札、母衣絹の名號、敦盛赤旗の名號などが、其の最たるものである。是等を見るもの、誰か古を思ばざるべき。

四 中國地方

○舞子

舞子の浦は、東西凡そ十町ばかり、古松蒼鬱として林をなし、或ひは踊るがごとく、或ひは舞ふがごとく、枝幹蟠屈して、高からざるも、千古の翠色は、白砂に映じて、言ふべからざる趣がある。前は、

須磨寺 舞子

中國地方

一一二

明石海峡を隔て、淡路島山に對し、手を伸ぶれば、將に撫せんとするの趣がある。若し夫れ、月東山の巔に出でたらんには、銀波細激、松影暗憺、漁火明滅、波上を飾ることゝなるべく。風景の絶佳なるは、須磨と伯仲の間にあるであらう。夏の納涼、秋の觀月、ともに佳なる所である。(大阪より神戸へ三十二哩)  
 頼山陽の詩に、

松翠砂明數戸村。鮮鱗上店位匏尊。每過一醉終成例。不記泥鴻第幾痕。

○明石浦

明石は、明石驛の所在地にして、一帯の海濱を明石瀉と稱へる。水

清く、波靜に、海水浴に適して居る。公園は、舊時の城の一部を割きて之れに充てたものにして、古松老杉、天を摩し、幽邃の氣、自から仙境たるを覺える。有名なる人丸神社は、停車場の東北八町の所で、明石城址の山續きにある。其の一小丘を人丸山と稱へて居る。

このとと明石の浦の朝ぎりに、

島かくれゆく船ぞこひしき。

とは、歌聖人丸の詠みしもの、實に其の景は、此の一首に盡してあると思はれる。(大阪より三十四哩)

○天郷の梅林

明石浦 天郷の梅林

一一三

山陽線大久保驛にて下車すれば、それより二十五六町北の方にある。地は、丘陵に倚りて、半腹から頂上に至るまで、概ね八重の薄紅梅にして、開花の候は、美觀名狀すべからずで。丘上より眺むれば、近くは淡路島山の臥牛のごとく海波に眠り、遠くは紀泉の峰巒など、雲煙模糊の中に望むことが出来る。其の風光の美は、梅花と雙絶と云ふべきである。(大阪より三十八哩)

○手枕の松

土山驛の西南一里、別府なる村社、住吉神社の境内に蔓つてゐる。老幹の周圍三抱えにも餘り、枝條の廣がること、東西五十間、南北十四五間、就中一枝の長く垂れて、地上に横たはれるものは、人の

腕を枕として、眠つて居る様である。其の名は、これより起つたのであらう。實に稀世の靈樹と云ふべきである。古來名高きもので、琴歌にも詠まれて居る。

今日をかどでの旅の空、

うかる、聲も播摩なる、

名所ところたづぬれば、

心ときめくながめかな。

賤の童にことゝへば、

おのれを名乗るはとゞぎす、

飛びゆく方は高濱の、

手峰の松

近畿地方

晴るゝ嵐にさそはれて。  
飾磨にかゝる帆はちらくくと、

夕日なつめに高砂の、

松は千年の色なほ深く、

引く手の多き手柄山。

落つる雁たつ鷺山に、

つばさまじふるその数は、

三五夜中の新月に、

千里の外の人どゝる。

ちいにうつらふ秋の空、

別府の雨さく手枕に、

夢もむすばぬ夜なくくの、

思はいとゞ増井山。

つもるが上に積る雪、

これぞまことにゆたかなる。

年のみつきと知られたる。

是は、播磨八景を詠みたるもので、なか／＼面白い調である。(大阪より

四十三哩)

○尾上の松

加古川驛より南方三十町の所に尾上の松と云ふがある。尾上神社の

尾上の松

境内にありて、相生の松と片枝の松との二つをいふのである。此の相生の松は、高砂の相生の松とは異なつて居る。相生の松は、雌雄兩種一根より生じ、地上より僅にして、其の幹は、二幹に岐れて居る。蓋し實生るとき、密着して、此くのごときものとなつたのであると思はれる。其の側にある片枝の松は、其の枝、ことごとく東に向つて居るので、俗に都戀いしき片枝の松と稱へて居る。神前の屋舎内に、尾上の鐘といふがある。古歌に、

高砂の尾上の鐘の音すなり、  
あかつきかけて霜や置くらん。

とあるは、即ちこれである。此に隣りて、尾上の松林がある。廣袤

四萬五千餘坪、老松、稚松相錯えて、一大林をなして居るが、其の老幹は、龍の天に登るが如きもの、蟠屈して猛虎の蹲踞せるがごときもの、千態萬狀、舞子の風光に似て居る。(大阪より四十七哩)

○高砂の松

前記尾上の松より七八町にして達する。高砂神社の境内にあつて、老幹は、地に匍ひ、枝葉は、四方に茂繁して、二十三四間に蔓つて居る。尾上の松と、もに、此の附近の名勝に數へられてある。

○石の寶殿

寶殿驛より西方三四町の所にある。一の石殿を神體として祭つてあるもので、其の前に拜殿がある。石殿は、靜が窟とも云ひ、社殿



中國地方

一一〇

を斜に倒したるが如きもので、其の屋根は、西に面し、扉は、天上に向ひ、其の上に稚松三四株を生じ、石殿の周圍には、赤土色に濁れる水の湛えられたれば、池中に浮べるがごとく見える。播摩名所中の隨一の奇觀といつても、不可なからう。(大阪より約五十哩)  
寶殿のお尻をかむや濁り水。と云ふ狂句があつた。

○曾根の松

阿彌陀驛の南、十八九町に曾根の天満宮がある。昔、菅原道真、筑紫へ左遷せらるゝとき、此の地を過ぎり、檜笠の岡に登つて、山海の風光を眺望したが、其のとき、一株の稚松を抽きて、手づから栽へられたのは、即ちこの松である。幹の高さ三丈餘、枝葉の繁茂す

ること、東西十八間、南北二十一間、一大翠傘を廣げたるがごとく屋上の松、手枕の松、相生の松などと、並び稱へられて居る。(大阪より五十哩)

○書寫山

姫路驛より北の方、約一里半にある丘山で。麓より二十餘町を上れば、有名なる圓教寺に達する。花山天皇の勅願所にして、康保三年、性空上人の開基である。この山に上るには、六條の路あるが、今表坂よりの路を案内せんに、元四辻には、後醍醐天皇御車寄の舊跡がある。其の北には、王子社あり、其の東北に西國三十三所女人巡拜の札所なる如意輪寺がある。これより登りて、砥石坂を過

曾根の松 書寫山

一一一

ぎ、左右に仁王の像を置きたる總門あり、これを入りて、溪流に架したる橋を渡りて、石階を上れば、一大伽藍の巍然として、老樹鬱葱たる中に抽きんずるがある。即ち圓教寺である。境内の廣大なることは、言はずもがな。講堂、食堂、常行堂、辨慶の井、奥の院不動堂、眞言堂、法華堂、根本藥師堂、文珠堂、和泉式部塔などがある。(大阪より五十八哩)

○廣峰神社

此に詣でんとすれば、播但線の野里驛にて下車するか、姫路驛にて下車し、一里餘の白國梅林の側より上るときは、二十町ばかりにて、達することが出来る。廣峰の山上に鎮坐ましまして、素盞鳴尊を祀

つた縣社である。社地は、白壁の堅牢なるを繞らして、高地になれば、遠く望むときは、恰も城廓のごとく、結構極めて壯麗である。農民は、五穀の神なりとて、豊穰を祈らんがために賽するもの、常に絡繹として断えたことは無い。其の峰續きの増井山の半腹に隨願寺といふがある。頗る古刹にして、其の名が、夙に著はれて居る。又増井山の麓に芭蕉翁の冢と稱へるがある。これは、芭蕉が、諸國遊歴に用ひたる簑を埋めて、紀念としたるところ、其の側に風蘿坊がある。岡崎の風蘿坊を移して、芭蕉翁の遺跡としたるものである。地は、溪流を臨み、後には、増井、廣峰、書寫の諸峰を負ひ、遙に播摩の海を望むべく、風色明媚の一勝區たるを失はぬ。

○龍野神社

龍野は、もと播磨脇坂氏の鎮城のあるところで、一市街をなして居る。龍野停車場へは、約一里二十町を隔て、居る。神社は、町の北部、臺山の半腹にある城址を以て充てたもので、文久年間の創立に成つたものである。社殿の石階より北に入りて、聚遠亭と號する一の建物がある。もとは、脇坂氏の別墅である。揖保川の碧流は、帯のごとく眼下に蜿蜒として、田野の間を縫ひ、播磨灘の煙波に白帆の點々飛ぶがごときなど、絶景得もいはれぬ。殊に數百株の櫻樹を栽ゑて、風致を添へられてからは、春陽駘蕩の候、花唇の綻ぶるに至れば、來り觀るものが少なくなない。其の山上に野見の宿禰の墓と

いふものがあると傳へて居る。(大阪より六十七哩)

○舟坂山

舟坂山は、大阪地方よりせば三石驛にて下車し、それより東十町にある。山は、播磨、備前の國境に跨りて、山陽線の鐵道は、隧道となつて、其の下を通つて居る。長さ六百餘間。むかし元弘元年、兒島高德、後醍醐天皇の隱岐へ遷され奉つられんとき、一族郎黨を率ゐて、此の地に要せんとして果さなかつた舊地にして、古來天嶮と稱せられ、歴史上著名の所である。

泥乾阪路尙陰氣。忍レ東輿中手欲輝。北風吹雨還成雪。朝日穿烟不作雲。地形扼寒山陽道。兵勢分明建武軍。誰知忠孝關人意。

到眼熊峰淚泫泫。

是れ頼山陽の、三石の感懐、拗律を作ると題しての作。三唱、懷舊の感を起さずる。

(大阪より七十七哩)

○芳嵐園

東よりすれば、吉永驛より二十三町、西よりすれば、和氣驛より二十三町にして、達す。此の園は、藤野村なる日笠川の西岸にありて、俗に藤野の櫻と呼んで居る。猿目神社前なる日笠川に架せる圮橋を渡れば、綠草の茂りて、綠氈を敷けるがごとき平野に出づる。此の清流に沿ふて、櫻樹數千株、枝を交へ、葉をつらね、春風、暖を送るの候に至れば、白雲縹緲、綠樹其の間に點綴して、風致の優

美なること、近傍に其の比を見ることは、出來ないであらう。

さくら草これ見よがしに咲いてゐる。

若し櫻花の謝したる後、さくら草の咲き誇るものあらば、彼は、確に一入の賞玩を受くるであらう。

(大阪より吉永へ九十哩、和氣へ九十四哩)

○西大寺

備前なる瀬戸驛の南二里半にある。天平勝寶三年、藤原氏の女、皆足の開基である。後正安年間、火災のために堂宇ごとくく烏有に歸したりしが、仙桂禪師が、再建したるものは、今現存して居るものである。石樓門の前に架せるは、永安橋と稱へ、其の彼岸は、

中國地方

翠松、長堤に亘り、門前の水上、西大寺川には、帆檣林立、風光佳にして眼をよろこばす、毎年正月元日から十四日まで、修正會と唱へて、法要を營むが、賽客少なくも四萬餘を下らずと云ふが、如何に其の盛なるか、知られる。  
(大阪より百餘哩)  
 西大寺の再建者仙桂禪師が、美作岱山に請に之くを送るとて、太宰純の詩に、

一鉢隋緣遊異邦。今朝欲別露橫江。岱山聞說眞禪刹。好爲人天樹寶幢。

○後樂園

後樂園は、岡山にありて、池田侯の別墅にして、地埤三萬七千餘

坪、泉石の布置、實に巧妙を極めたもので、水戸の偕樂園、金澤の兼六公園と、ともに、日本三公園の一に數へられてある。岡山城の北、旭川の環流せる畔に臨んで、自から別乾坤をなして居る。入口なる鶴見橋を渡れば、はや公園の人となるのである。延養亭は、公園内第一の建物にして、明治天皇、西巡のとき、玉座を設けられたる所、其の傍に池があつて、池畔には、屹立せる巨岩のあるあり、岩腹より松樹の生ずるなど、趣がある。其の西にあるは、望湖閣にして、柿葛の建物なるが、むかし藩王の茶事を修めたる茂松庵といへるはこれ。茂松庵は、頗る素朴なる構造なるが、寧ろ雅致の掬すべきものが多い。其の東北に二色が岡といふがある。地は丘陵をなし、其

後樂園

の下には、紺碧を湛えたる池がある。其の附近には、楓樹甚だ多く  
 晩秋、錦を晒すの候ともならば、觀楓の人は、殆ど群をなすとのこ  
 とである。其の東に簾池軒といふがある。後は、竹林を隔て、旭川  
 の碧流を帯び、前に、池に枕んで、園内第一の眺望といふべきとこ  
 ろ。其の東に二架の藤棚がある。一はゆかりの色、一は白、それよ  
 り少しく東に杜鵑草を栽えたる池がある。こゝに折曲つたる小橋を  
 架してある。其の東北にありて、百餘種の梅林をしつらへ、芳香衣  
 袂を襲ふのとき、こゝに來たり遊ぶものが、少なくない。園の中央  
 には、唯心山とて、一小丘の屹立して、園内を睥睨して居るかのこ  
 とく見ゆるものがある。傍に唯心堂がある。仲秋の觀月には、最も

妙である。これを下れば、池ありて三島を浮べて居る。其の南に偏  
 したるもの、最も大きく、一橋を架し、島上に島の茶屋と云ふがあ  
 る。其の池何亭などと、名づくるものが、尙は其の外に多い。

(大阪より百二十餘哩)

○偕樂園

岡山市の東に接して、縣道は、其の中央を貫通して居る。操山にあ  
 る一の公園にして、丘上には、老松古杉が、繁茂して晝尙は暗き感  
 がある。加ふるに數百株の櫻樹あれば、花時人の群集するところと  
 なる。山の中腹に三勳神社とて、清麻呂、正成、高德を會祀してあ  
 る。人工的庭園の美は、後樂園に及ばないが、天然の勝形は、此の

園に求むることが出来やうと思はれる。

○吉備津神社

備前及び備中に同名の神社があつて、兩社相離ること僅に十餘町、備中にあるものは、賀茂郡真金村にあり、吉備津彦命を祀つてある國幣中社である。備前備中及び備後三社の第一に位する。真金村大鳥居から左折して、老樹の兩側に茂れる賽路を行けば、其の盡くるところに石階がある。これを登り詰めたらば、本殿である。拜殿の西に架したる長廊は、長さ百八十餘間、規模の廣大なる、建築の壯麗なる、備中に冠たるものであらう。備前にあるものは、津高郡一宮にありて、吉備津彦命を祀る縣社である。推古天皇の元年はじ

めて鎮座せしめられたものである。往時は、結構壯麗であつたが、漸次衰頽して、今は、舊觀をも留めざるに至つた。(大阪より廣瀬へ百五哩)

○吉備の中山

備中なる吉備津彦神社の背後にある一の丘陵にして、茶臼山又は鯉山ともいふのである。吉備津彦命の陵墓である。地は、一帯の砂山にして、松樹雜生し、一條の小流山中より發し、吉備津神社の境内を串流して、宮内村に注入する。古歌に其の名のあらはれたる細谷川なるものは、即ち是れである。

真金ふく吉備の中山おびにせる

吉備津神社 吉備の中山

細谷川のおとのさやけさ。

又後鳥羽天皇の御製に、

まがねふく吉備の中山うちとけて

細谷川にいはそゞぐなり。

○有木山

前記の吉備の中山の山續にして、其の山頂に一の小祠がある。有木神社となへて、吉備津彦神社の攝社である。此の地、風光の賞すべきものは無いが、古來名所として夙に著はれて居る。備中名所に云ふ『中山ついきなる有木は、狭きところなれど、成親卿の配所にて、遂に其處にて身まかりたまひしことなど、あはれなるものか

ら、世に名高きにや。大賞會の歌などに詠まれし、ことごとろなるにや思へりしにはあらざりけり云々』又『河本宣易、わが宿を訪ひ來つるに、問へば、古歌に、有木の山の玉椿、とよめる椿、今に在りと云ふ。おのれ、玉椿にあらす、白椿なりといへば、されば、なほ又、をかしきことあり、いにしへの椿は、いと大木なりしが、遠からぬ世に、あたりなる佛堂の焼けたりしときに、これも焼けて枯れたり。今のはそのひこばへなどあれど、猶ほ白き花咲けり。其の葦は、有るかなきかにて、散るときは、櫻のごとく、花びら一ひらづ、散れり』とある。藤原經衝の歌に、  
いゝのることしるし有木の山なれば、

有木山



千歳のほどもたのもしきかな。

○備中高松

庭瀬驛より西北二里ばかりにあり。むかし豊臣秀吉の水攻を行ふた  
舊蹟にして、國道眞金村より三十餘町を入込んだ所にある。路傍に  
一の草庵がある。この東南にある堤防は、水攻のときのものである。  
其の北なる小丘は、八幡山といつて、秀吉の監したる舊址の腰掛松  
といふのは、山頂に残つてある。又有名なる高松の稲荷は、高松村  
大字稻荷にありて、停車場より北の方二里半の所で。妙教寺の境内  
にありて、古來靈顯いやちこなりとて遠近よりの賽客は、常に絶え  
たことがない。毎年陰曆の初午には、群集雜沓して、其の數幾萬と

いふことを知らぬほどである。此の日、六七十人の幼童をして、賽  
客に線香を購はしむるに、一日一人にて、二圓以上を得るのは、左  
まで珍らしくないとのことである。これに依りて如何に其の參詣者  
の多いかは推知せられる。(大阪より庭瀬へ百十六哩)

○藤戸の舊蹟

庭瀬驛より西の方二里ばかりの所にある、平家物語に『佐々木盛綱、  
壽永三年、九月二十五日、夜に入りて、浦の男を一人かたらひ、直  
垂、小袖、大口、白鞆卷などを取らせ、賺しおほせて、此の海に、  
馬にて渡らぬべきところやあると聞きければ、此の男、案内は、よ  
く存じさふらふ。たとへば月の瀬のやうなる處さふらふが、月の頭

は、東に候ふ（大脇の渡を云ふなるべし）月の末は、西にて候ふ（是れ藤戸の渡をいふなるべし）件の瀬のあはひ、海面十町も候はん、是れ御馬などにて、たやすく渡らせたまふべしと申しければ、佐々木、いざさらば、彼の男と二人紛れ出で、裸體となりて、件の川の瀬のやうなる所を渡りて見るに、實にいと、深うはなかりけり。膝腰のたつところもあり。深きところを泳ぎて、浅き處に泳ぎ着きぬ。男申すは、是れより南は、北より遙かに浅く候ふ。敵、矢なみそろへて、參らせ候ふところへ、裸體にては、いかにも叶ひ候ふまじ。唯これより歸らせたまへといひければ、佐々木實にもと歸りける。下郎は、ところもなき者にて、又、人にも語れて、案内もや教へつ

らん。我ればかりこそ知らめとて、彼の男を殺し、首掻き切りて捨てにける。案ずるに此の邊にある八軒家、黒石、粒原等、一帯の海岸を指せるものか。昔は、海水此のあたりまでも、來たものと知られる。（大阪より庭瀬へ百十六哩）

○沙美海水浴場

玉島驛の西南、約三里にある沙美海水浴場は、後には、老樹の鬱葱たる山を負ひ、南は、瀬戸内海に向ひ、砂白く、松翠に、奇岩は、海中に突兀として波上を抜き、風光畫くがごとく、水清く、波緩かであるから、婦女老幼といへども、海水浴をなすには、最も適當の場所といつて宜しい。南には、讃岐の鹽飽七島を望むべく、風光は、

附近に得がたき絶勝の地といはねばならぬ。(大阪より百二十七哩)

○圓通寺

玉島港の西南二十五町の處にある。僧行基の開基したるところで、境内は、寺院としては狭く、一千餘坪しかないが其の庭園は、巨岩大石を布置し假山もある。小池もある。奇樹の岩頭に生ずる、異草の池塘に點綴せるなど、且つ眺望に富んで居るので、人の林泉を説くも、は、先づ此の寺を推さざるは無いといふことである。

汀には何の咲きけん圓通寺。

といふ句がある。(大阪より百二十六哩)

○金神

金神と云ふは、何を祭つてあるのか知らぬが、下層社會に著るしき勢力を持つたものである。金光さまと云つて、彼等の信仰を受けて居る。強ち金力を意味したものでなからう。其は他事に傾くから別問題として、これがあるために、金神といふ停車場さへ置かれたといふのは、鐵道院も、収入の點から割出したので、まさか信仰心からでもなからうが、これで兎も角、參詣者の便利となたであらう。吉備村大字大谷にありて、舊時は、佛閣にして大谷金神と稱へたが、明治六年、金光神社と改稱して、社殿を宏壯にし、えらい勢を以て、迷信家を風靡して居る。春秋二季の例祭のごときは、賽客四方より雲集して、すばらしい景氣である。(大阪より百三十七哩)

金神と板に書きたる貼札に

小便よけとなるぞかなしき。

とは、或る人の狂歌であるが、小便せられて悪い所へは、板に金神の二字を書き記して、釘附にしてあるところがあるからである。これは重に上方あたりの風習と見える。苟も勿體なくも、其の御神體の如何に拘はらず、小便よけに使ふなどは、罰が當りはせぬか。

○高島行宮の舊蹟

笠岡驛を去ること二里の神島外村字高島は、周回一里二十餘町の小島にして、民家四十餘戸、其の王泊といへる所は、神武天皇、東征のとき、行在所となつたところで、高島の宮の舊址は、即ち此の處

である。(大阪より百四十餘哩)

○福禪寺

福山驛の南三里餘にある鞆町の海岸に位せる梵刹にして、應和九年の創造に成つた寺で。空也上人を開山としてある。其の對潮樓と云ふのは、海岸に突出したる一の樓閣で、前面は、仙醉島の青螺と相對し、遙かに四國の峰巒を雲煙模模の中に望まれて、無數の島嶼は、點々として碁布羅列し、其の眺望の明媚なる、飽くことを知らぬほどである。此の後の山上に沼名熊神社と云ふがある。後に山を負ひ、前は、無數の群島を隔て、四國の峰巒を杳靄の間に望み、山光水色ともに、絶佳なる一仙境たるを失はぬ。(大阪より百四十七哩)

高島現行宮の舊蹟 福禪寺

○阿伏兔觀音

鞆町より海岸に沿ふて、西に行くこと一里、一岬角の突起して、海中に斗出するものがある。是れ千歳村なる能登原の阿伏兔崎であつて、ことごとく巉岩より成つてゐる。其の岬頭に觀音堂がある。海拔殆ど百尺、風色の絶佳なるは、前の對潮樓にも譲らず。中國通ひの汽船は、直ぐに其の下を通るから、船より仰げば見ることが出来る。

浪にかく仰ぎ見る目に阿伏兔崎。

といふ句が残つて居る。(大阪より百四十七哩)

○千光寺

尾道町の後方になる大寶山の半腹にある。一千百餘年前の創建で、多田滿仲の再興したるところと傳へて居る。石階を登れば、半腹に一の平地がある。懸崖に倚つて、本堂を建て、千手觀音を安置してある。其の前に玉の岩一に烏帽子岩と云ふのがある。高さ七間、幅五間、其の東には、重ね岩、屏風岩、蛭石などの奇岩が、横たはつて居る。遙に東南を眺むれば、尾道の市街は、脚下に蹈むがごとく、港内に入出入の船舶は百帆を張れる、煤煙を吐けるなどがある。又遠く見渡せば、豫讃の翠峰、水に漂ふがごとく、無數の島嶼が、碁布羅列して、人工に成れるものごとく、實に形勝の地である。

(大阪より百五十九哩)

○佛通寺

本郷驛の東一里二十五町にある。應永四年、小早川春平の草創にして、愚中和尙が、開基である。寺の四邊は、奇岩怪石にて形成し、古松これに點綴し、其の中央には、一條の清溪の走つて居るがある。これによりて、東西に別たれ、東を伏龍窟と云ひ、西を猛虎岩と稱へ、清溪三活龍水と號する。眺望に富んで居らぬが、其の境の閑雅幽邃にして、稀に見るの仙境である。(大坂より百七十三哩)

○縮景園

元和五年、淺野長晟、弟邸を廣島に營みて、庭園を修め、爾後代々の國守、其の庭地を擴めて、これに修補を加へ、二百七十餘年の星

霜を経て、今日に至つたものである。面積は、一千二百餘坪に過ぎぬが、川を隔て、斜に二葉山、向陽山と相對し、岸に閘門を設けて、河水を引き、池となし、これを濯纓池と名づけ、中に小島を築いてある。瀑もある、湍もある。自から深山幽谷の景致を模して、巧なるものである。池の南は、平坦の地にして、清風館と云ふのが此處にある。坐して全景を望むことが出来る。館と相對するところの小丘を禰福山と名づく。その他、白龍泉、水心島、楊柳灣、迎暉峰、銀河溪、臨巖岡、綠瀧洲などの勝景がある。地積は、僅少なれば、規模の小さいは、言はずもがな。されど巧にこれを配したる人の苦心は、鑑に賞すべきである。(大坂より百十二哩)

佛通寺、縮景園

○宇品港

廣島驛より分岐したる鐵道は、此の市街に至つて、終點となつて居る。明治十七年から五年間の日子を積んで、其の桑港を成功したるもので、石を疊みて、堰堤を築き、以て風波を防止して居る。港内水深く、大船巨舶を入るゝは便利である。中國、四國、九州通ひの定期汽船は、概ね此の港に寄泊せぬものはない。船客貨物の出入は、常に頻繁にして、山陽道中、馬關と相伯仲の間にある。日清、日露の兩役には、此の港より出入したることゝて、其の繁華は、蓋し想像も及ばぬ位であつた。

(廣島より四哩餘)

○嚴島

宮島驛より日々幾回となく發する汽船に乗れば、僅に十餘分時にて、嚴島に達することが出来る。此の島は、東西二里、南北一里、周圍八里弱、嚴島神社は、市杵島姫、田心姫、湍津姫を祭つてある國幣中社にして、相殿には國常立尊、天照大神、素盞鳴尊を祭つてある。本社は、本殿、幣殿、拜殿、祓殿等にて、祓殿の前には、高舞臺がある。これを狭みて、其の左右に百八十餘坪の平舞臺がある。淺洲の上に突き出でゝあるから、満潮のときは、海水、其の床下を浸すことゝなれば、海波に浮んで居る様に見える。遙の海中には、大鳥居がある。拜殿の左右の回廊は、百四十八間の長さに連亘し、一間ごとに鐵燈籠が釣つてある。満潮のとき、海上より眺むれば、

宇品港 嚴島

中國地方

一五〇

實に美觀である。尙ほ二三の事は、次に頂を別つて、記すこととし

た。  
芥川煥の吟詠に、

(大阪より二百二十四哩)

本間嚴島甲西州。宮殿祥浮大海流。遺跡途思平相國。長留金柱  
照千秋。

○千疊閣

千疊閣は、嚴島大宮の岡にある。豊太閣、朝鮮を討たうとして、九州に赴く途次、本社に賽して。軍の勝利を祈り、天正十年、凱旋のときに建設したるもので、梁間十間五尺、桁行二十間、縁幅八尺にして、四方に欄を設けてある。閣内には、豊國神社を祭つてある。

社内には、多くの飯杓子が堆積してあるが、俗に飯取り杓子ととなへて、賽客の奉納するのである。

○彌山

嚴島の彌山は、其の島の峻嶺にして、海拔一千三百七十尺、巨岩怪石の間に神社佛閣の散在して、山態、頗る秀麗である。一の鳥居より一町の處に、瀧の宮がある。其の後の山に白絲の瀧がある。螢の名所として宮島八景の一に數へられてある。瀑前には、御幸石と云ふがあつて、嘗て高倉上皇、其の石上に座され、瀧を御覽なされたところである。これより中堂、二の鳥居、仁王門、水晶石等を過ぎて、麓より十八町の所に御山神社がある。それより更に數町にし

千疊閣 彌山

一五一



て求聞持堂がある。一にこれを本堂と唱へる。護摩修法の煙斷ゆることなく、鈴鐸の聲、鏘々として、林に満ち、人をして自から佛の功力を感せしむる。其の堂後には、弘法大師が、加持水に用ひたりといへる阿伽井がある。表面に梵字を刻したる曼陀羅石がある。此所を過ぐるときは、山嶺にして頂上石といふのがある。高さ三丈、周圍四尺、岩下に佇立すれば、廣島市街より周防の群峯指顧の中に浮ぶがごとく、遠くは水煙漂渺の間に白帆の風を孕みて、走るなど、四顧の風望、畫も及ばぬ。

○紅葉谷公園

嚴島の一溪にして、小澗幽邃、水清く、孱溪として、石上を奔つて

居る。岸の兩側には、楓樹多く、三伏の候、翠緑の滴るがごとく、樹下に佇めば、南溪の幽谷より、澗底の清風を送り來たつて、肌の冷かなるを覺える。是は此の谷の特色ともいふべきであらう。若し夫れ、晩秋霜深くして、紅葉二月の花よりも紅なるに至らば、其の眺や、中々凡ならぬ。木原宗宅が詠に、

丹楓蔭冷水奔流。臨水泉々起小樓。想得絃歌又前後。數聲鳴鹿滿小秋。

○長濱公園

嚴島なる町盡處の北端、棧橋より三町の處に、長濱公園と云ふがある。海を隔て、西の方、大元公園と相對し、一條の白沙、新月の形

を劃して、入江を狭み、沙上老松偃蹇して、翠影を江に浸し、山光水色は、鍾めて一睥の中に收められる。附近に海水浴場がある。

風涼し此處には夏は來ざりけりとの駄句もある。

○大元公園

嚴島八景の一たる大元神社の境内であつたところ。東西の兩側は、老樹蒼鬱たる岡埠に接し、北は、灑灑なる内海を隔て、遠山を望み、近くは有の浦より米が濱に至るの沿岸、翠黛と相對して居る。南は、平遠幽邃にして、溪谷深く、展開し。はるかに繪馬が岳の絶壁を雲煙の間だに望み、園中に櫻樹多ければ、春陽輕暖を送りて、花唇を

開かしむる候に至らば、花香雲影、來たり遊ぶものが多い。殊に、地は、柯めて閑靜にして氣は澄み、騒客一日の杖を曳くに價値なしと云へぬ。

○蓬萊巖

嚴島の聖崎にある。其の北角にして、宮島驛より海上僅に二海里、前には、廣島灣を望み、後には、御山、繪馬が嶽の翠嶺、天漢を摩するあり。岸頭の蟠松、枝を垂れて、低く波上を摩せんとするところ、二つの巖がある。雙々相擁して、突兀海上に聳えて居る。

曼珠院法親王の詠に、

よもの海波しづかなるときにあひて、

聖が崎をけふ見つるかな。  
聖が崎とは、此の巖の所在地の名である。

○桂濱の松林

これは安藝の倉橋島にある。往古は、長門島と稱へて居た。天平八年、遣新羅使大石叢麻呂が、

我いのち奈我刀の島の小松原、

いくよをへてかかみさびわたる。

と詠まれたるところである。白沙青松の相映する邊に、桂濱神社がある。近年内外の遊客來たり觀るもの多く、其の風光は、漸く世に知られて來た。

此所へ行くには、字品又は吳から渡航するを便とする。

○錦帯橋

周防國岩國町にある。一に算盤橋ともいふ。往時我が國の架橋工事中、最も構造の奇巧と、堅牢とを以て、著外なるものに數へられ、日本建築の好模範を示したるものと賞せられて居る。錦川に架して、延長百三十五間、最も高きところは、水面より十三間、河中に石を疊みて、四個の橋脚を築き、これに半月形の五小橋を架したるものにして、一柱を用ひず、框を組み、層々相頼らしめ、これによりて全橋の重量を支へて居る。延寶元年の秋、始めて造りしものにして、其の後幾回と、修補を加ふるも、未だ一回も一時に全橋を架け

換へたることはない。此の橋の堅牢なるは、四個の橋臺にあつて、其の敷石は、三重にして、下段は、六十間内外、中段は三十間、上段は十五間乃至二十間、多年奔流矢のごとき間に立ちて、未だ嘗て崩壊したることは無い。頼春水が、錦帶橋を詠じて、

五條連作一長條。錦帶高懸到紫霧。不見相如題去柱。

惟知識女度來橋。雌雄截雨虹覆接。斷續受風鳥鵲飄。

儘怪人行搖未墜。春山相對水迢々。

又橋畔に錦帶橋の碑を建てられてある。(大阪より岩國驛へ二百三十八哩)

○壇の浦

下の關市の海邊である。元治二年、平族、安徳天皇を奉じて、屋島

から遁れ來たり、哀なる最後を遂げたるは、史上に著名なるところである。馬關土産に云ふ「壇の浦は、上古此の邊、一帶の總稱なりし由。其の故は、長府二の宮の沖、潮の干際に當りて、同宮第三の鳥居なり。夫より早鞆の明神まで、五百壇の石階ありしをもて。壇の浦とは呼べりと、従前は、此處も、漁人繁榮して、一の市街をなせしが、後、瀬海防禦の爲め、此の地に砲臺を設くるに當り、文久三年、其の漁家を今の壇の浦に移し、今は、其の名のみを存す。地は、後に火の山を負ひ、西に御裳川を控え、前は、早鞆海峡をへだて、近く豊前の明神崎と相對す。此の地に遊ば、自から當時の事を忍び出で、無情の感を起さしむ」云々と、柴栗山の壇浦懐

壇の浦

古に

黒鬘餐牛舟水乾。文龍西幸海漫々。管纓滿地當時恨。

獨有陶真曲裡彈。

此の附近に、安徳天皇を祀れる赤間宮、日清全權の媾和談判をなしたる李鴻章の宿なる引換寺、龜山八満宮などがある。小門の海水浴場は、市の西端にある。  
(大阪より三百五十餘哩)

### 五 山陰地方

#### ○天の橋立

日本三景の一に數へられたる天の橋立は、與謝の海の中央に突き出

でたる一の沙洲にして、江尻から西南に向つて二十七八町、幅三十七八間、其の南端は、小海峽を隔て、吉津村の文珠に對して居る。舟中よりこれを望めば、恰も一字を劃するがごとく、翠松相連りて、海上に浮んで居るやうである。碧水天に連りて、天上に長橋を架したるが如く思はれる。天の橋立の名は、蓋しこれより起りしものであらう。長洲の盡きんとする處に、橋立神社がある。其の北に磯の清水がある、海中の沙洲にあるに拘はらず、水、最も清冽にして、毫も鹹味を帯びない。加茂季鷹の詠に、

日本のあとの二景は知らねども、

まづ一の字とよめるはし立。

天の橋立

岡本廸の吟詠に、

宛然萬古橫中海。内外相通似動搖。石見天神奇巧跡。青松一帶

架浮橋。

此に至らんには、京都より三時二十分、大阪より約五時間を汽車に托すれば、可いのである。

○成相山

天の橋立の風光は、樗嶺か、相成山から眺望するのが、最も佳なるところである。樗嶺より見れば、横一文字に、成相山上より観れば、斜に縦一文字である。成相山に登れば、半腹に成相寺がある。與謝の江山の全景を収めて觀望せらるべく、其の快絶奇絶、とても筆に

は盡されぬ。人は言ふ、松島の景は、富山に占め、橋立の景は、成相山にありと。其の眺望の最も佳なるは、傘松の附近にして、試みに其の景を背後になし、立ちながら身を屈めて、股間から窺へば、翠松、波光に映じて、水中に天あり、天上に水ありて、上が海か、下が天か、俗に所謂天の橋立股眼鏡とは、即ち是れで實に天下無雙の奇觀といはれる。

○智恩寺

智恩寺は、天の橋立の岬端と、文珠の切戸と相對せるところになつて、宮津を出で、此に至らんには、其の途中なれば、觀覽するの便がある。本尊は、梵天帝釋化現の作に成れる文珠菩薩なれば、里

人は、切戸の文珠と呼んで居る。境内廣濶、門前に茶店、酒樓など、軒を並べて居る。毎に寶物を展覽してあるが、百馬の角、天狗の爪、木に寄生したる鎌、龍の鱗など、科學的眼光を以て見れば、唯、一笑に附するのみであるが、見て損はなからうから、一覽を勧めめる。地は、成相山に對し、風光清絶、先づ天橋附近の勝地なるに愧ぢない。

○玄武洞

但馬國豐岡驛附近にある。土俗之れを石山と呼んで居る。全山ことごとく岩石より成り、其の形、柱材を束ねたるがごとく、許多堆積して、山となつて居る。六角、八角の石柱は、束ねたるがごとくな

りて、山側に横たはりて、洞側の前後左右、いづれも、五角乃至八角の緻密なる黒き堅牢なる石の長さ數丈なるが、臺々として、聳立せるが、六七寸乃至一尺二三寸ごとに龜裂したる跡が見える。實に奇觀といはねばならぬ。洞の全長四十餘間、左右及び中の三房に分れ、左房は、間口十三間、奥行十八間、中房は、間口十三間、奥行十五間、右房は、間口十四間、奥行十七間、殊に右房の外側頂上から一懸泉の孱濼として滴るがある。又中房の内側よりは、泉水の湧出するなりて、洞底に瀦溜し、溺冽鏡のごとく、洵に奇觀と云はねばならぬ。玄武洞とは、柴野栗山の命名したるものなるが、別に石柱洞、蜂宗洞の名もある。此に至らんには、京都より山陰線によ

山陰地方

りて、豊岡驛に下車するか、又は、城崎驛にて下車するもよい。汽車にて此の兩驛の間を走るとき、圓山川の對岸を望めば、丘陵の半腹に奇異なる石窟を望むのが、それである。(京都より城崎へ九十九哩)

○城崎温泉

城崎川の西岸に位し、古來有名の温泉である。北海に瀕して、土地高燥、空氣清涼、最も三伏の避暑に適する。鹽類泉にして無色透明、温度は、湧出の個所によりて、多少異なつて居るが、概ね華氏百度乃至百十度の間にある。湧出口は、すべて六ヶ所ある。いづれも一二町を隔て、居る。宏壯なる浴場は、山水の美と相待つて、遠邇に響いて居る。(京都より九十九哩)

○出雲大社

八雲山の麓は千木高く、宮柱太く、鎮座ましまして、神代出雲の朝の祖神大國主命を祀つてある。垂仁天皇の御宇、皇居のごとく本社も改造し、天仁三年、武内宿禰造營を司りて、社殿を新築したるものにして、これを稱して寄木の御造營と號した。其の後、幾たびか改築したりしが、現今のは、明治七年の造營である。神域は、三方、丘陵にて圍ひ、後丘を八雲といひ、西は鶴山、東は龜山と稱へる。末松青萍子が詠に

神代何悠邈。天壤立際涯。犇々豐葦原。坤柱未定基。  
堂々大國主。乃能經營之。偉功比日月。萬世有光輝。

城崎温泉 出雲大社



若不見觀然大社高千尺。宇迦山光終古碧。  
誰か神域に入りて、敬虔の意を起さざるものはなからう。

(京都より大社へ二百四十四哩)。

○大山

大山は、伯耆富士又は出雲富士の名がある。山陰第一の高峰にして、火山通有の圓錐狀をなして居る。海拔五千六百五十餘尺。これに登らんには、大山驛より南して、山麓尾高村よりするを順路とする。半腹に大山寺の伽藍がある。昔は、規模宏壯であつたが、後縮少して、舊觀を留めないが、棟楹柱礎、みな創立當時のものを其のまゝに用ひてあるから、依然として千古の建築物といふも誣言ではなからう。

らう。其の眺望の快、筆に盡されぬ。大山寺より絶頂まで一里半、七八時間を費さざれば、達することが出来ぬ。是は、道の嶮なるは勿論、樹木なく唯、草の生ずるのみであるから、これを把持し、漸く登るからである。山の東北面は、火口の潰裂したる跡にして、絶壁削立、一見其の舊時の噴火を想像せしむるに足るのである。下山は、此の方面より砂礫を踏みて、落下するとき、一時間を立えずして、大山寺に着くことが得られる。これによりて、其の登攀のいかに苦しきかを推知せられる。(京都より大山驛迄百九十八哩)。

○尖道湖

尖道湖は、出雲にありて、中海と相通じ、中海は、又細き水路を以

四國地方

一七〇

て、日本海の三保灣に通じてゐる。湖畔に形勝の地が多いが、東西四里、南北一里半、一に碧雲湖とも云ふ。周圍十三里餘の湖面は、風風ぎて、鏡のふときとき、伯耆富士は、毎に其の雄姿を装ふて居る。湖中に一の小島がある、嫁が島と稱へる。月明の夜、こゝに船を浮べて、四顧の風光を掬うるときは、其の快、蓋し言ふべからざるものがあらう。

(京都より松江へ二百二十三哩)

六 四國地方

○栗林公園

高松市の西南端に位し、舊松平氏の遊園地である。表口は、東にあ

つて、こゝをいれれば、凡そ一町の間は、左右に挑、櫻の相雜へて裁うるがある。それより左折すれば、考松の長短くして、蟠屈したるが如きもの數十株、實に一の奇觀である。此處を過ぎて、園内に入れば、一大地の碧波を漂はして、我れを待つものゝごとく、其の周圍に經過を通じてゐる。舊は此の周邊に東海道五十三驛を象りて、一に指點することを得せしめたとのことである。池の東邊に形富士に似たる一小丘がある。登臨すれば、東は、田野遠く拓け、眺望開豁、池中に一の小島がある。相對して池畔に一亭樹がある。構造清酒。これより北に向つて進むときは、裏門に出ることが出来る。高松に行かうとするには、山陽線岡山より宇野に出で、それより連絡

栗林公園

一七一

船にて高松の港に着くので、海上は、僅に數時間である。

○屋島

屋島は、高松の東一里ばかりの處にある山で、左まで高くはないが、山上平坦にして、屋上のごとくなつて居るので、此の名がある。山麓瀉元より登ること十七八町にして、屋島寺と云ふがある。これより東の海は、源平の古戰場たる著名のところにして、路傍に佐藤經信の碑がある。屋島寺から西の方二町ばかりの所に獅子の靈巖がある。一の巨巖は、懸崖に突起し、其の形は、獅子のごとく見える。屋島山の眺望は、此處が第一である。遠くは、中國一帶の山は、北に連り、前面の脚下は男木、女木、兜、南などの諸島が、羅列して

居る。左方には、四國の翠巒雲に入り、近くは八栗山、五劍山などを望むことが得られ、山光翠色、其の美なること、筆舌の及ぶところでない。

○寒霞溪

小豆島にありて、其の奇勝の名を天下に馳せしめたのは、寒霞溪であらう。元神懸と書し、又、鍵掛にも作る。むかし應神天皇、釣を巖角に掛けて、攀ぢのぼらせ給ふたのであると傳へられて居る、斷岩壁立、忽ちにして洞布、忽ちにして瀑布、五步趣を改め、十步觀を改むといふ狀にして、其の奇勝は、筆の盡すなく、口の言ふ能はざるものである。かくて、山頂に達すれば、南には、阿讚の山を眺

め、北には中國の城市を望み、蒼海杳渺、幾千の島嶼は、皆双眸に入つて、天下の壯觀を極めてゐる。こゝに到らうとすれば、小豆島の庄港に上陸し、それから島の南方を東行して、草壁村に至り、此より直ちに山に登るのである。

○白峰神社

鴨川驛の北、一里半の所にあつて、崇徳天皇の御陵である。綾の松山の半腹にある縣社。其の南に白峰寺がある。緑樹の被はれて、北の一方のみは、斷崖に臨み、鹽飽の七島は、眼下に指點し得べく、瀬戸内海の碧波、恰も大地のごとく、風光絶佳の地である。寺の西北端に兒が淵と呼べる所がある。懸崖絶壁の間に一の飛瀑がありて、

直下五丈餘、其の傍に不動堂がある、是れ亦幽邃の一境たるに懐ぢなし。

(高松より九哩)

○海岸寺

多度津の西にあつて、其の附近一帯の海邊を屏風が浦と稱へて居る。寶龜五年、僧空海の誕生之地と傳へられて、有名な所となつて居る。其の境内に、空海産湯の泉、湯手掛の松などがある。又數百株の翠松、境内白砂の間に技を雜へ、納經山の麓には、駒止石、筏岩などの奇石が、坐に昔を語つて居るやうである。風光勝絶の一區といふて可からう。

(高松より十九哩)

○彌谷寺

白峰神社 海岸寺 彌谷寺